

---

# 夢わたり 《其の伍》

猫乃 鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢わたり 《其の伍》

### 【Nコード】

N8828Q

### 【作者名】

猫乃 鈴

### 【あらすじ】

雨がしとしと降り注ぐ夜、大西が店のドアを開けると、そこに少年が一人うずくまっていた。少年がゆっくりと大西を見上げる。それは十三年前に死んだはずの少年だった。和菓子的美味しい喫茶店、かいやぐら蜃気楼。店主の大西と十五年前の『朝日奈一家事件』の関係とは……。夢と現実が交錯する、ミステリーサスペンス『夢わたり』。大西と鈴の出会いを描いた回想の第五弾。『※この作品には挿絵があります。不要な方は機能をOFFにしてくださいませよう、お願いいたします』

## 序章

> i 1 8 2 3 8 — 9 4 9 <

### 序章

雨の日の外出というのは、大概、気の重いものである。

霞野署の新米刑事、常磐ときわ 要かなめにとっても、それは例外ではない。

一昨日から降り続く雨は、履きつぶした革靴にじわりじわりと染み込んで、常磐の足を更に重くする。

ただ、常磐の気が重たいのは、雨のせいだけではなかった。

大通りから一步裏に入った道の、昼間でも薄暗い急な階段を下りたところに常磐の目的地はある。

蟹気楼かいやぐら—k a i y a g u r a —

不思議な名前が電飾のスタンド看板に書かれたこの店は、和菓子  
の美味い喫茶店。昭和初期の頃を感じさせる、古めかしい、よく言  
えばモダンな佇まい。

常磐は傘を畳むと、ドアの脇に置かれた少し錆びたスチールパイ  
プの傘立てに入れた。

今入れた、常磐の傘の他に傘はない。

こんな雨の日は——。

思いながらドアを開けると思っていた通り、普段から客の少ない  
店内はガランとしていた。

静かな店内に鳴り響いたドアベルに、店の奥に居た店主がこちら  
を振り向き微笑んだ。

「やあ、こんにちは。常磐君」

「こんにちは、大西さんおおとし」

和服姿に前掛けがこの店に良く似合う。

まだ四十ほどの歳のはずだが、すでに白髪の間じった髪は小さく後ろでまとめられ、丸メガネを掛けた顔は、いつも常磐を穏やかに迎えてくれる。

客のいない店内で、大西<sup>おおとり</sup>圭介<sup>けいすけ</sup>は壁に掛けられた写真を取り替えていた。

奥の壁に三枚。花や風景を撮った写真が、はがきサイズほどの小さな木の額縁で飾られている。

「今日は鈴さん<sup>りん</sup>はいないよ」

大西は壁から少し離れて、その傾きを確認しながら言った。

蜃気楼は和菓子とお茶のセットが美味しいのだが、常磐の目的がたいてい、この店にいる朝日奈<sup>あさひな</sup>鈴<sup>りん</sup>という人物にあるからだ。

「お休みですか」

眠り病という特殊な体質の鈴は、時と場所を選ばず眠りに落ちるため、店のドアに掛けられた看板が、『起床中』になっていないと会うことはできないという、少々やっかいな人物だ。

看板はたしか『就寝中』だった。

「ううん。今は灯ちゃん<sup>あかり</sup>が寝てるから。ずっと二階にいるんだよ」

大西が住居となっている二階をちらと見上げた。

灯<sup>あかり</sup>というのは、ここに居候している女子高生で、彼女もまた人とは違う体質をしている。そのために時々、鈴の手を借りなければならぬらしい。

「そうですか」

「だから、また出直して来てくれないかな。こんな雨の中悪いけど」  
「あ、今日は朝日奈さんに会いに来たわけではないんです」

慌てて言った常磐に、大西が珍しい物を見るように常磐を見た。  
常磐は落ち着かなくなつて、目を逸らす。

「えっと、今日のおすすめは何ですか？」

つい、本当に訊きたいと思つていたことと違うことを、常磐は口にした。

「今日は麩饅頭」

「ふまんじゅう？」

「美味しいよ？ つるつとした口あたりで瑞々しくて、もちもちと弾力があつて……。このジメジメした季節には丁度いい」

説明しながら大西は壁の写真の位置を直し、顎に手をやり首を傾げた。

「手伝いますよ」

常磐はまだ飾られていない写真を手に取った。

「いい写真ですね。大西さんが撮ったんですか」

何気なく言つた一言だったが、大西が呼吸を止めたのが分かつた。しまった。こんな風に切り出すつもりはなかったのに。

「常磐君、今日は何の用なのかな」

穏やかだった大西の声色に微妙な変化が感じられた。

「……今日は、大西さんに伺いたいお話があつて来ました」

意を決して常磐が大西と向かい合うと、大西は常磐の予想に反し、口元にかすかな笑みを浮かべた。

「そう。……いや、いったい、いつになったら訊きに来るんだろう  
と書いていたんだよ。君は鈴さんの事件を調べると言っていたのに、  
まったく捜査が進んでいないみたいだし」

鈴の事件というのは、十五年前に起きた『朝日奈一家惨殺事件』  
のことだ。鈴はその事件の唯一の生き残りである。十五年経った今  
も、犯人は捕まっていなかった。

大西は配置のうまく決まらない写真をカウンターのの上に載せ、茶  
を二人分入れて戻ってきた。店の中央のソファ席に座り茶をテーブ  
ルに置くと、一つを自分の口にゆっくり運ぶ。

腰を据えて……ということだろうか。

常磐は大西の様子を探りながら、その正面に浅く腰を掛けた。窓  
の外で降り続ける雨の音だけが、やたらと大きく聞える。

「……それじゃあ、伺いますが」

「うん」

大西は湯呑みを置いて常磐を見た。

「十五年前、私は鈴さんを殺したんだ」

## 第一章・1

### 第一章

—1—

畜生。

寒い日だった。

マンションの屋上は風を遮るものもなく、容赦なく大酉の体温を奪って行く。

開いていた黒いミリタリーコートの襟を掻き合わせた大酉は、コートぽたんの裾についている釦が取れかかっているのに気がついた。

煙草をくわえた口の端で、思わず小さく舌打ちをする。

カメラを持つ手が震えた。

手ブレした写真では突き返される。大酉はポケットに入っているカイロで、穴の開いた手袋から出ている指先を暖めた。指先まで手袋で覆ってしまうと、どうしてもシャッターを押す感覚が鈍る気がする。

大酉はカメラマンだった。

それも三流ゴシップ雑誌専門の。

もっぱら芸能人のスキャンダルや、政治家の裏事情を隠し撮りするるのが、大酉の仕事だった。

仕方が無い。これで飯が食えるんだから。

今もある大物政治家が三十近く歳の離れた若い女と、あるマンションで会っているという情報が入って、ここに来たのだ。

車が走ってくる音がして、大酉は啞えていた煙草を足元のコンク

リートに押し付け消すと、手すりの隙間から望遠カメラで下を覗き込んだ。しかし車は止まらず通り過ぎて行く。

予定の時間をとくに過ぎていた。今日はもう来ないかもしれない。

向かいに見えるマンションの五階が、その情報のあった場所。

ごく普通の住宅街。一般の家庭より少しグレードは高いが、高級というほどではない——とはいえ、大西にはとうてい住めそうになかった。

夜なのに明りがついていない部屋も目立つ。

なんでこんなところ……と思ったが、こんな所のほうが見つかりづらいと考えたのだろう。しかし、見つかるときは、どんな所にも見つかるものだ。

できれば玄関側。

二人がやって来て、一緒に部屋に入る瞬間を押さえたかったが、そちら側にあるマンションの入り口には、ご苦労なことに管理人がいて、屋上へと上がることができなかった。

ここからだとベランダしか見えない。

しかも部屋にカーテンが引かれてしまって、部屋での二人を撮るのは難しい。夜ともなるとなおさらだ。朝まで張り付いて、カーテンを開けるまで待たなければならぬ。それでも撮れるとは限らないのだ。

くそ。

まあ、いつもハイヤーで来ているという情報だったから、最悪は通りからマンション入り口までの間を押さえられればいい。そうすれば、後は記事を書く奴らが面白可笑しいタイトルと、事実と未確認の情報を混ぜた文章で仕上げてくれる。



大西は溜息をついた。

口から出たそれは、煙草の煙のように白く風に吹かれ消えて行く。

> i 19045—949 <

目指していたのは報道カメラマンだった。

撮りたいのはスキャンダルじゃなくてスクープだった。

一部の人間の好奇心を満たすのではなく、大勢の人間の注意を引き、関心を集めるものが撮りたかった。

かつては、自分にそれができる才能も可能性もあると思っていたし、希望も自信もあったのだ。

しかし、それらはひどくあっけなく崩れていった。

人に言わせれば、所詮その程度の志しだったのだと、己の弱さを指摘されるだけなので、いつの間にか友人と呼べる者も減っていった。

己のことしか考えず、学生の際に勘当同然で飛び出した田舎の実家には、今年の正月にも帰ることはなく、もう連絡も取っていない。そして、自分の想いとは違った形でもカメラしかない大西には、この仕事でたいして住み心地の良くないアパートの家賃と、生活費を稼いだしていくしかなかった。

チャンスがないだけなんだ。

チャンスさえあれば、俺だって。

そのとき、大西の耳にガシャンという破壊音が聞こえた。

なんだ？

音のした方へ目をやる。

明りのない部屋が目立つ六階で、明りが点いている角部屋から、また何かが壊れる音がした。望遠レンズで確認すると、黄色いカーテンに中で人が走り回っているような人影が映る。

何をしているんだ。

夫婦喧嘩か何かか。

カーテンが開かないだろうか。

記念に一枚撮ってやる。

すっかり退屈していた大西は、その部屋にカメラを構えてシャッターに指をかけていた。

すると、ベランダの窓が開けられた。カーテンを揺らしながら、中から誰かが転がり出てくる。何か様子がおかしい。

ベランダに出て来た人影をファインダーで追いかける。それはまだ小柄な子供。少年だった。

ふらふらと腕を押さえながら、ベランダにもたれかかっている。

怪我もしているのだろうか。

部屋からの明りで逆光になり、顔はよく見えない。

ファインダーを食い入るように覗き込む。

「おいおいおいおい……」

思わず大西の口から、そんな声がもれた。

少年がよろけながらベランダの縁によじ登ったのだ。少年の胸ほどもある高さの、ベランダの縁は太くはない。何をしているのかと見ていると、どうやら少年は隣のベランダへ飛び移ろうとしているらしい。

隣のベランダまでは結構な隙間があり、手を伸ばしたくらいでは到底届かない。

「まてまてまて」

どう考えても無理だろう。

そこへゆらりと部屋の中から、少年とは別の人間が出て来た。

誰だ？

その人影は少年へ手を伸ばす。

しかし、それは少年を救うために伸ばされたものではなかった。

少年が落ちた。

それはひどくあっけなく、一瞬の出来事で、大西は息をするのを忘れた。

ただ、大西のカメラはしっかりと落ちていく少年を追い、その指は連続してシャッターを切っていた。

バサバサと木々の間を抜けた少年の体は、駐車場に停められた車の陰になり確認できなかったが、ドスリという重い音が、少年の体が地面に叩きつけられたことを大西に知らせる。

とっさにカメラをベランダへと戻すと、部屋の逆光になった人影がこちらを向いていた。

はっとした大西は柵の下に身を隠した。

目が合った？

……いや、そんなはずはない。  
こちらに気づくはずはない。

高鳴る心臓に、白い息が漏れる口元を押さえる。

恐る恐る、ベランダの様子を探るため、そっと柵から顔を覗かせる。

ベランダにはもう人影はなかった。開け放されたままの窓にはカ

ーテンがはためいている。

今のはいったい……。

目の前で起きたことが、本当に起きたことだったのか、大西には分からなくなっていた。

大西はカメラの機材を抱えると、慌てて屋上から階段を駆け下りた。

## 第一章・2

—2—

大西はマンションを飛び出すと、少年が落ちたはずの場所へと向かった。

「たしか、この辺り……」

大西は街灯の明かりも頼りないそこを見回し、駐車場脇の花壇にそれを見つけた。ゴクリと唾を飲み、躊躇<sup>ためら</sup>いながら近づく。

まだ中学生くらいだろうか……。

まるでスポットライトを浴びるように、街灯の明かりの下、少年は花もない花壇に上半身を仰向けに倒れていた。コンクリートの駐車場の方へ投げ出された下半身の、右足が膝からおかしな方向へと曲がっている。

少年の傍へと近づき、片膝をついて様子を確認しようと手を伸ばしたところ、少年の鼻からどろりとした血液が流れ出たのを見て、顔を歪め思わず手を引く。

よく見れば、少年の体の下は土が湿って色が変わっているのが分かった。

上を見上げ、少年が落ちた六階のベランダを見る。

——高い。

少年に目を戻した大西は、妙なことに気がついた。

少年の着ているトレーナーが裂けている。元は白かったと思われる赤に染まったトレーナーは、木々を抜けたときにできたのとは明らかに違う、刃物によると思われる切れ目が数箇所あった。

そういえば、さっきベランダにいた人影はいったい誰なのか。

これは……。

大西は心臓の鼓動がまた、速くなるのを感じていた。

恐怖からではない。緊張からでも、焦りからでもない。……それは好奇だった。

これは事故ではなく事件だ。

ぞくぞくするような感覚。今まで、どんな人間の秘密を覗き見て、暴<sup>あば</sup>いてきたときにも感じなかったような興奮が、そこにはあった。

そのとき、かすかな足音が大西の耳に聞えてきた。少し小走りに、それでも焦ることもなく、目の前のマンションの階段を下りてくる足音。

大西は振り向いて足音のする方へと目をやる。しばらくして、マンション奥の細い通りを、一人の人影が通りかかった。五十メートル以上離れた暗いそこで、人影がこちらを一瞬チラリと見たのが分かる。

大西の目にベランダにいた人影と、その人影とが重なる。

あれは犯人だ。

大西の胸の高鳴りが一層速くなる。

そのまま足を速めるでもなく歩いていく人影に、慌てて大西はカメラバッグを肩に掛けなおし立ち上がった――が、何かにコートの端を引っばられ、再び大西はその場に片膝をついた。

なんだ？

見ると大西のコートの裾を小さな手が握っていた。

驚きに目を丸くして倒れている少年の顔を見ると、少年がうつすらと目を開き大西を見ていた。

「……たすけて……」

血の泡が溢れる口で、しかしはっきりと少年が言った。  
生きている。

大西は通りへと目を戻した。人影が視界から消える。

大西はコートの裾を引いた。しかし、少年の細い手は思いのほか、しっかりと大西のコートを掴んでいて放れない。

くそ。

大西は立ち上がりながら、コートを力任せに引っ張った。すると少年の手は簡単に剥がれ落ち、一瞬、大西は体勢を崩したが、すぐに人影を追って走り出した。

これはチャンスなんだ。

逃がしてたまるか。

通りへと出た大西は、あの人影を探した。

どこに行ったのか。人影の向かった方へ、辺りを見回しながら駆け出した大西は、次の瞬間、頭に衝撃を受け意識を失った。



大西は重い瞼を持ち上げた。

頬に冷たく硬い感触。目の前にはアスファルトの地面。いったい何が起きたのか……。

地面に伏していた体を起こそうとすると、頭に鈍痛が響いて再び地面に突っ伏す。

いったい何なんだ。

痛む頭に手をやると、指先に濡れた感触。見ればそこには血がついていた。大西は混乱していた。

これはいったい、どういうことだ。

何とか体を起こすと、カメラバッグが転がり中身をぶちまけているのが見えた。焦りながら大西は大事なカメラを拾い上げる。すると、そこに欠けた煉瓦が転がっていた。

大西は理解した。大西が追いかけてくるのに気づいたあの人影は、物陰に隠れて大西をやりすごし、背後からこの煉瓦で殴ったのだろう。

「くそう！」

大西は煉瓦を掴むと、近くの壁に投げつけた。煉瓦は砕けて地面に散らばる。

よろけながら立ち上がると、前方から帰宅途中のサラリーマンと見られる中年男が、疲れたような足取りでやって来た。大西を怪訝な顔で見ながら、距離を取るようになって通り過ぎる。

大西はカメラバッグを肩に掛けた。その重みに頭がズキリと痛む。そのときだ。

「キヤーッ！」

鋭い女の叫び声がした。あの駐車場の方からだ。どうやら誰かがあの少年を見つけたらしい。

通りを見ると、先ほどすれ違ったサラリーマンが遠くで足を止め、



こちらを振り返っていた。

……なんだよ。

大西はそちらに背を向け歩き出した。何かに追い立てられるように、自然と足が速くなる。

路地裏に停めておいた、古くて小さな白いバンに乗り込むと、大西は苛つきながらアクセルを踏み、自分のアパートへと車を走らせた。

## 第一章・3

—3—

大西はカーテンの端からもれる光に目を覚ました。頭がガンガンと痛んで再び目を瞑る。<sup>つむ</sup>

どうやって帰ってきたのか、よく覚えていない。

昨夜のことは夢だったのだろうか。

髪の中に手をやると、かさついた感触がして、爪の間に乾いた血の固まりが付着した。

……夢ではない。

のろのろとベッドから起き上がると、昨夜から着たままだった服を脱ぎ、洗濯機に放り込む。バストイレ一緒に狭い洗面所で頭を洗うと、水が腫れた傷口に染みた。

物干しに吊るしたままになっていたタオルを引っ張り、頭に掛けて、同じくハンガーに掛けっぱなしのスウェットを外すと袖を通す。カーテンを薄く開け外を見ると、じめつとした室内とは対照的に、表はカラッとしたいい天気で、その眩しさにそれ以上カーテンを開くのをやめた。

安物の電気ストーブを点けるとその前に座り、水の滴るくせつ毛を雑に拭う。

ベッド脇の目覚まし時計を見ると、もう昼前になるところだった。大西はリモコンを手に取りテレビのスイッチを入れた。今見たいのは、もちろんニュースだ。

電源がついたテレビで、ちょうど大西の知りたかったニュースが放送していた。

『——警察は鈴君<sup>りん</sup>の意識が戻り次第、話を聞く方針ですが、今だに鈴君の意識は戻っていないということです』

あのマンションを映しながら、ニュースキャスターが言ったところで画面が切り替わる。

やはり夢ではない。

“鈴”というのが、あの少年の名前らしい。無事に病院へ運ばれたようだ。意識は戻っていないと言っていたが……。

おい、もう少し詳しい状況を教えろ。

大西はチャンネルを回した。

『現場と中継が繋がっています。現場の山下さん』

別の放送局で、やはり同じマンションの映像が映し出される。

そうそう、そのマンションだ。

『はい、山下です。今、私は現場となったマンションのある、霞野の住宅街に来ています。私の後ろに見えます、あちらのマンションの六階でその事件は起きました』

あらかじめ撮っておいた映像に画面が切り替わった。マンションの一室に捜査員が次々と入っていく。

大西が撮りたかった玄関側からのアングルだった。

あのマンションの管理人め。屋上からの撮影に、どのくらいの金を貰ったのか。

大西がそんなことを考えていると、画面がリポーターへと戻される。次にリポーターが言った言葉に、大西は自分の耳を疑った。

『殺害されたのは、大学講師の朝日奈あさひな 陽介さんようすけ四十五歳と妻の明子さんあきこ四十三歳、長男の光さんひかり十九歳です。次男の鈴君りん十五歳は一階の駐車場脇に倒れているところを発見され病院へ運ばれましたが、意識不明の重体となっています』

誰が殺害されたって？

『亡くなった三人の死因はナイフで刺されたことによる出血死とされていますが、次男の鈴君は犯人から逃げようとして、ベランダから落下したと見られています』

被害者の顔写真を映しながら、リポーターの説明は続く。

大学講師という職業柄によく似合う、真面目で固そうな顔つきの男と、その妻という女。その女の写真を見て大西の脳裏に蘇ったのは、あのとき「たすけて」と言った少年の顔だった。

父親とも、学生服姿で髪を明るく染めた、長男の写真とも似ていないが、あのときの少年、朝日奈 鈴は母親の写真によく似ていた。これがみんな死んだのか？

『警察は鈴君の意識が戻り次第、事情を訊きたい方針ですが、犯人に刺されたと見られる傷もあり、意識不明の重体で今も危険な状態が続いているということです。室内は荒らされており、警察は強盗目的の犯行も視野にいれ犯人を捜索中です。なお犯行当時、現場から走り去る車が目撃されており、車に乗っていた人物が事件とやらかの関わりがあるとして、行方を追っています』

それなら、ベランダにいたあの人影は……。

『閑静な住宅街で発生した残酷な事件に、周辺の住人にも不安が広まっています』

つまらない台詞で締めくくったリポーターに、大西は眉をしかめた。

それだけか。他に何か分かっていることはないのか。

チャンネルを切り替えるが、すでに昼を過ぎたテレビではそれぞ  
れ、くだらない番組が始まっていて、ニュースを流している局はな  
い。

「くそ」

大西は財布を掴むと、アパートのすぐ裏にある個人経営のコンビ  
ニエンスストアへと走った。

手で押し開けるドアの、すぐ脇のラックにあった新聞を掴みレジ  
に行く。小銭を切らしていたため、仕方なく千円札をレジ代に叩き  
つけるように置いた。

寒空にサンダルを履いただけのスウェット姿、タオルを首にかけ  
たままの大西に、不審な顔をする店員の男が、つり銭を用意するの  
ももどかしく、大西は新聞を広げる。

三面記事のトップ。黒く塗られた枠に抜き文字で、でかでかと書  
かれた『一家惨殺』の文字が大西の目に飛び込んできた。

## 第一章・4

—4—

犯人は玄関から家に侵入。まず玄関で朝日奈 陽介をナイフで殺害し、その後キッチンにいた妻の明子を殺害。長男の光はリビングで殺害された。光は激しく抵抗したとみられ、殺害された三人の中で一番傷が多かった。次男の鈴は犯人に襲われながら、六階のベランダから落下。駐車場脇の花壇で発見されるが、意識不明の重体。

せっかく買った新聞でも、事件について分かる詳細はその程度だった。

後は知り合いや近所の人間の、一家に対しての同情的な言葉や、お決まりの「恨まれるような人たちではない」といった、どうしてもいい情報ばかりで紙面は構成されていた。

まあ、まだ昨夜のことだから仕方がないのかもしれないが。

確かにあのとき大西は、これは事件だと直感したが、まさかこれ程まで大きく、残酷な事件だとは想像もしていなかった。

一人の少年が誰かに傷を負わされながらベランダから落ちた。

それだけで、すでに大きな事件だったはずなのに。

床に広げていた新聞を閉じ、大西はハッとした。

そうだ。カメラだ。

何を呆けていたのだろう。あの瞬間を、自分はフィルムに焼き付けたはずだ。

玄関先に置いたカメラバッグの中から、カメラを手に取り大西は違和感に襲われた。

……そんな馬鹿な。

カメラにフィルムが入っていない。

慌てて裏蓋を開けて確認するが、やはりそこに入っているはずのフィルムはなかった。

何故だ。カメラバッグをひっくり返して中をあさるが、替えのレンズと、未使用のフィルムが数本出てくる他は何も出てこない。

フィルムを入れ忘れたことはない。いつだってチャンス逃がさぬようにと、常にカメラにフィルムはセットしてあったはずだ。

あのとき、シャッターを押した指の感触を覚えている。フィルムが送られていく感覚も確かに感じた。落ちていく少年をコマ撮りのように連写した、シャッター音も耳に残っている。

興奮したせいか、ズキリと頭の傷が痛んだ。

そういえば目を覚ましたとき、バッグからカメラが外に放り出されていた。

まさか。

しかし、それ以外に考えられない。

あいつだ。

あの犯人が大西を殴った後、カメラからフィルムを抜き去ったに違いない。

怒りにも似た感情が大西を充たしていく。手にした空のカメラを床に叩き付けたい衝動に駆られるが、結局しなかった。

やっぱり、自分には運がないのだ。

すべてのツキに見放されているに違いない。

あのときの写真さえあれば。明日には新聞や雑誌、そしてテレビにも自分の写真が映しだされていたはずなのに。

まあ、これだけ大きな事件だ。警察は血眼になっているだろうし、犯人も割合すぐに捕まるだろう。

——ああ、頭が痛い。

大西はベッドの上に寝転がり、ぐしゃぐしゃのままのシーツに再び包まった。



ドアのチャイムの音が聞えた気がして、大西は瞼をほんの少し開いた。

すると、もう一度チャイムが鳴るのが、今度は確かに聞えた。誰だろうか。

大西には、わざわざ顔を合わせなければならないような客なんて、覚えがない。

居留守を決め込もうとシーツを頭に被ると、今度は乱暴にドアを叩く音がして、驚いた大西は体を起こした。

何なんだ。

少しでも開いていたカーテンの外は、いつの間にかすっかり暗くなっている。再び強く叩かれたドアに、小さな恐怖を感じながら、大西は足音を潜めドアの前に行き、覗き窓から外を見た。

スーツ姿にコートを着た男が三人、ドアの前に立っていた。一人が鋭い眼光で覗き窓を見返してきて、大西はドアから離れる。

誰だ。

「大西圭介さん、中に居ますよね。警察です。開けてくれませんか」

物騒な顔つきに似合わない、思いのほか穏やかな声が言った。

警察。……ああ、なるほど。

細くドアを開けると、それを閉じさせまいとする足が、ドアの隙



間に差し込まれた。

「……何か」

一応訊ねる。あの事件のことを、訊きに來たのだろうということ  
は予想できたのだが。

まあ、本来ならば目撃者として、すぐに自分から警察に出向くべきだったのだろうが、出来れば面倒なことには関わりあいたくないし、残念ながらフィルムもなくなった今、大西が犯人について警察に話せることは少ない。

大西の肉眼では、犯人の顔を見ることはできていないのだ。

しかし少し妙だ。わざわざ個人に事件のことを訊きに來たのだろうか。なぜ自分があの場に居たことを知っているのか。

「霞野署の牧本 まきもと 慎之介 しんのすけ と言います」

ずんぐりとした体型の、少し小柄なその刑事は、決まりごとのように大西に警察手帳を見せながら言った。やたらと丁寧な口調が薄気味悪い。

そして手帳を閉じて言った牧本の口から出た言葉は、大西の予想外のものだった。

「あなたに殺人の容疑がかかっています。署までご同行願います」

## 第二章・1

### 第二章

—1—

すでに午後九時になるという時間。大西は警察署の取り調べ室の中にいた。小さな部屋に机と椅子が2脚、小さな格子付きの窓が一つあるだけの殺風景な部屋だった。

一応、任意での同行、取調べということだったが、刑事たちの自分に向けられた、まるで汚いものでも見るような視線が気になる。

「昨夜、起きた事件のことは知っていますか」

大西の前に座っているのは、牧本と名乗った刑事だ。歳は三十後半といったところか。言葉こそ丁寧だが、その口調は重く冷たかった。

視線はじつと大西を射抜くように見つめていて、訳の分からない不安が大西を襲う。自分は別に殺人なんてしていないのだから、何も怯えることはないのに。

「ええ、まあ……」

「昨夜、現場近くから慌てたように走り去る車が目撃されています。そしてこれは、現場から三百メートルほど離れたガソリンスタンドの防犯カメラに映っていた物なんですが」

机の上、大西の目の前に一枚の写真が置かれた。拡大すればナンバーもはっきり分かるであろう古くて小さな白いバン。間違いなく大西の車だ。この写真では、慌てているかなどというのは分かりは

しないが。

「昨夜、あなたはあのマンションにいましたね」

「ええ。いましたよ」

隠しても仕方がない。

「それで、昨夜あなたはあそこで何をしてたんですか」

「仕事ですよ……。知ってるんでしょう、俺の仕事」

「カメラマン……でしたっけ」

牧本はわざとらしく手元の資料を見ながら言った。

「あんな時間に、あんな場所で何を撮っていたんですか」

「ある大物政治家が女と会ってるって話を聞きましたね。それを撮りに行ったんですよ」

「政治家が？ あんな場所で……ですか」

「知りませんよ。俺はただ、そういう情報があったからあそこへ行って、そいつを待ち伏せしてただけなんだ」

つい口調が荒くなる。

「それで、写真は撮れましたか」

「いや、結局そいつは現れなかった」

「なるほど。それは残念でしたね」

一体何なんだこれは。

「おい、いい加減にしろ。俺が犯人だとも言いたいのか」

「今、あなたの家を家宅捜査しています」

「はあ？」

「礼状も取ってありますが見たいですか」

「なんで俺の家が調べられなきゃならないんだよ！」

思わず椅子から立ち上がった大西は、別の刑事に後ろから肩を押され再び椅子に座る。牧本よりもずいぶんと大柄な、見るからに体育会系という体格のいい男だ。

「まあ、落ち着いてください。犯人じゃないなら何も出ては来ないでしょう」

見ず知らずの人間が今、自分の部屋の中を好き勝手に荒らしていると思うと胸がざわついた。

もちろん血のついた凶器なんて出てはこない。それでも、大西の部屋には一歩間違えば犯罪になりかねないような写真のネガがいくつも保管されていた。

どうしてこんなことに。

「少し休憩しますか」

牧本が時計を見て言った。その言葉は、まだこの取調べが終わらないことを示している。

疲れて項垂れた大西の耳に、ドアをノックする音が聞えた。ドアが薄く開いて、牧本より若い刑事が顔を覗かせる。牧本がドアの方へと行くと、その若い刑事が牧本に顔を寄せてひそひそと何かを話しているのが目の端に映った。

何だ。何を話している。

牧本が若い刑事に何かを告げ、席へと戻ってきた。

「何だ。おい、何話してたんだよ」

牧本は机の上で手を組むと、大酉の顔を覗きこんだ。

「大酉圭介さん、あなたを正式に殺人の容疑で緊急逮捕します」

まったく口調を変えることなく言った牧本に、大酉は目を見開いた。

「待て。ちょっと待ってくれ。何でだ！ 俺はあの家族を殺してなんかいない！」

怒りのままに両手で机を叩く大酉にも、牧本は動じることもなく、静かに小さな袋を大酉の目の前に掲げた。中に何か入っている。

「これに見覚えはありますか」

>i22207—949<

中に入っていたのは十円玉ほどの釦ぼたんだった。

「これは……」

「そう、あなたのコートの釦です。裾の一つが取れていましたが、形も大きさも他の釦と同じでした」

確かに裾の釦が取れかかっていたのは覚えているが。

「これがどこにあったか分かりますか」

そんなの分かるはずがない。

眉を顰<sup>ひそ</sup>めた大西にゆっくりと牧本は言った。

「ベランダから落ちた少年、朝日奈 鈴君の手の中ですよ」

大西は一瞬、呼吸をするのを忘れた。牧本が何を言ったのか分からない。いや、何を言ったのかは分かる。しかし、それが何を意味するのか、すぐには理解できなかった。

「鈴君が病院に運ばれたとき、左手の中にこの釦を握り締めていたそうです」

大西は体から血の気が引いていくのを感じた。呼吸が上手くできない。唾を飲めばゴクリと喉が鳴った。

あの時だ。

犯人を追おうと立ち上がった大西を引き止める、あの感触。コートの裾を握っていた小さな手。

「違う……違うんだ！ それは、俺がその子の様子を見に行ったときに取れたもんなんだよ！」

「様子を見に？」

「そうだ！」

事件の被害者が手に握り締めていた証拠品。それは単純に考えれば犯人に結びつけられる物だろう。このままでは本当に殺人犯にされてしまう。必死に大西はあの時の様子を説明した。

「あの時、俺は隣のマンションの屋上でカメラを構えてたんだよ。あの、大物政治家のスクヤンダルを撮ってやろうと思ってた。そのとき、何か壊れるような音がして、俺はカメラをそっちに向けたん

だ」

大西はカメラを構える手振りを交えながら話す。

「すると、あの部屋のベランダから、男の子が出てくるのが見えたんだ。誰かに追われてたんだと思う。そう、あれは逃げようとしてた。続けて誰かが出てきて、男の子は隣のベランダに飛び移ろうとして――落ちたんだ」

“落ちる”という部分で、手を一度上げ机に叩き下ろす大西を、怪訝な表情で見つめる牧本。

「俺はマンションを駆け下りて、男の子が落ちた場所を探した。男の子はすぐに見つかった。俺は様子を見ようと近寄ったんだよ。その時、男の子にコートを掴まれたんだ。その、えっと、鈴君だった？ その子が釦を握ってたのはそのせいなんだ」

「その時、鈴君の意識はあったのか」

「ああ。俺に助けると言った。そうだ、助けてって言ってた」

大西は何度も頷きながら言う。

「……それで、その後あなたはどうしたんです」

「マンションの奥の通りを犯人が通ったんだよ」

「奥の通りというと、あの細くて暗い？」

「そう。それで俺はそいつを追いかけたんだ。そうしたら突然殴られた。俺も被害者なんだよ。あいつは俺のカメラのフィルムを抜いていった。あのフィルムには、犯人が写っていたかもしれないの。いや、写っていたはずだ。俺はあのベランダに向かって確かにシャッターを切った」

悔しそうに拳を握り締める大西に、牧本は眉間に深い皺を刻む。

「すまないが、私にはあなたの言っていることがさっぱり分からない」

「え？」

「つまりあなたは、ベランダから落ちるあの子を見て写真を撮った。落ちたあの子の傍へ行き、あの子は助けを求めてあなたのコートを掴んだ。そしてあなたは奥の通りに現れた、犯人かもしれない奴を追いかけて殴られた。犯人が写っているはずのフィルムは、その時に犯人によって抜き取られた」

「そう。そうだ」

何が分からないと言うのだろう。

「いい加減にしろっ！」

今まで一度も声を荒げなかった牧本の怒声に、大西は驚いて肩をすくめた。そんな大西に牧本はぐっと顔を近づけた。大西は怒りに満ちた牧本の目に映りこむ、自分の情けない顔を見た。

「お前は目の前で血を流し死にかけている子供が、助けを求めているのを振り切って、本当に犯人かどうか分からない人間をカメラを持って追いかけたというのか」

大西の後ろにいた刑事も、腕を組みながら大西を蔑むさげすように見下ろし言った。

「信じられないな。ベランダから落ちた瀕死の子供が目の前に居たら、救急車や警察を呼ぶのが普通だろ」



“普通”なんて知らない。

「た、確かにあの時、俺が取った行動は少しおかしかったかもしれない。でも、あの時は、犯人を追いかける方が大事だと思ったんだ！」

「この状態で、助けてと言っている子供が目の前にいてもか！」

牧本の手により、また机の上に広げられた数枚の写真。そこには赤黒く晴れ上がった痣、無残に骨の折れた足、生々しく開いた傷口が写されていた。とても見ていられる物ではないのに、目を離せなかった。

口の中に湧いた粘ついた唾液が飲み下せず、喉に纏わりつく。

「……動機は。俺にはあの家族を殺す理由が無い」

「職場からも家族からも信頼され人望のある一家の主。あるじ家庭を守る明るくおっとりとした妻、仲が良く将来を期待されている二人の子供。ファインダー越しに覗き込んだ、幸せを絵に描いたような家族に嫉妬したんじゃないのか」

後ろで言った大柄な刑事を、大西は振り返る。

「な……いくらなんでも、そんな理由で一家皆殺しなんてしたりしない！俺は確かにこんなだが、そのことで自分に苛つく事はあっても、誰かを妬んだりなんかしない！」

「殺人犯には何人か会っているが、人を殺す理由なんてのは、どんな理由もその程度かと思うようなものばかりだよ」

牧本の口調が静けさを取り戻す。

「あなたには、まだまだ話を聴く事になりそうだ」



## 第二章・2

―2―

「花壇の土に残っていた足跡が、あなたの家にあったスニーカーと一致しました。逆にあなたのスニーカーについていた土は、マンシヨンの花壇の物と一致しています」

牧本の取調べは淡々としていたが、同じことを何度も飽きずにねちねちと繰り返す。大西の身柄の拘束はすでに三日目になっていた。誰かに面会することも、連絡を取ることも出来なかった。大西に面会したいという人間は一人も現れはしなかったが。

「だから、俺はあの子の様子を見に行っただって言ったじゃないか」  
「隣のマンシヨンの屋上からは、あなたの唾液のついた煙草の吸殻が見つかります」

「だから……それも、説明しただろ。俺はあそこで、大物政治家のスキヤンダルを撮ろうと待ってたんだ」

「マンシヨンに入るところを撮りたいなら、反対側からの方がよく撮れるんじゃないんですか。あっちはベランダ側だ」

そんなことは知っている。大西自身、そうしたいと思っていた。

「だったらなんだったというんだ！ 俺がああ屋上にいたからって、誰かを殺したことはないだろ！」

もう三日同じことを叫び続けた声はガラガラに傷<sup>いた</sup>んでいた。それでも主張し続けなければならない。自分は殺してなどいないのだから。

「面白いものを見せましょうか」

「面白いもの？」

「事件の翌日の朝刊です。それとこっちは今日発売された週刊誌なんですけどね。もしかしたら、あなたの言っていた大物政治家というのは、この人のことなのかと思って」

事件の翌日の朝刊の三面記事は、もちろん朝日奈一家の記事だ。それは大西も目にした。しかしそれとは別のページを、牧本は開いて大西に見せた。そこに大西がああ、寒さを我慢して待ち続けた政治家の名前があった。

「こちらはもっと分かりやすいですよ」

人の醜い好奇心を煽る見出しが敷き詰められた、下品な表紙の週刊誌。

ひととき大きく扱われた見出しに、『スクープ!』という文字を添えられて、その名前はあった。

「そうだ。こいつだよ。俺があの日撮ろうとしてたのは」

雑誌の中には、その政治家が車を降りて、女の腰にいやらしく手を回しながら建物の入り口に入って行く様子を、コマ撮りで追った写真が二ページに渡って掲載されていた。

場所は都心のブランド店が立ち並ぶ高級街のシティホテル。

「あなたが撮りたかったのがこの人だとすると、あなたはあのマンションに何をしに行ったんですか」

大西に入った情報はガセネタだったわけだ。

とことんついてない。こんなにもついていないことがあるのかと思うと、可笑しくなってきた。大西はくくと肩を揺らし笑い始めた。

そんな大西にも、牧本は相変わらず冷たい視線を向けるだけだった。

「あなたの勾留期限の延長を申請します」



「この血はなんですか」

別の日、牧本は大西に袋に入ったタオルを見せた。そんなものに見覚えはないと言おうとしたが、どうやら大西の家の物らしい。そういえば、事件の翌日にシャワーを浴びたことを思い出した。

無意識に殴られた頭へと手をやる。

「俺の血だ。あの一家のじゃない。言っただけだ。俺も犯人に殴られたって」

「確かに。調べたところこの血液はあなたのものと一致しました」

「そうだ。そう言ってるじゃないか。見てくれ、まだ傷も残ってると思う。煉瓦で殴られたんだから」

大西は頭を差し出したが、牧本はそれには見向きもせず話を続けた。

「犯人にですか」

「ああ」

「とすると、あなたはずいぶんと幸運だ」

「幸運？」

「犯人は一家四人を襲い、三人をその場で殺害した残酷な人間です。なぜ犯人はあなたを殺さなかったんでしょね」

知るかそんなこと。

「朝日奈家の長男の光さんですが……」

疑問を投げかけておきながら、自分で話題を変えた牧本に、空中に放り投げられたような不安定な気持ちになる。

「彼は酷く抵抗したようです。腕や手の損傷が激しかった。弟の鈴君を何とか逃がそうとしたのかもしれませんが」

それはずいぶんと弟想いな兄さんだ。

「あなたのその傷、本当は彼につけられたものじゃないんですか」  
「何？」

「光さんを殺そうとした時に争って、抵抗した彼に殴られたのでは」

「違う！ 俺は煉瓦で殴られたんだ。マンシヨンの外、あの通りで犯人に後ろから殴られたんだ」

「その煉瓦は」

「煉瓦は……壁に投げつけて粉々になったけど」

「あなたが自分で自分を殴ったということも考えられる。自分も被害者だということにするために」

大西を犯人に結びつけるためのこじつけは、次から次へと出てくるのに、大西が犯人ではないと主張できる要素は、まるで見つけれ

れなかった。

「今日はこの辺にしましょうか」

「待ってくれ！……そうだ。あの子は？　あのベランダから落ちた子はどうなったんだ」

椅子から立ち上がった牧本に、大西は自分も立ち上がり牧本を引き止める。

「朝日奈　鈴君のことですか」

「ああ、あの子なら分かるはずだ。俺が犯人じゃないって。あの子なら本当の犯人の顔を見てるはずだろ？」

「彼は今でも意識不明の重体だ」

牧本は鈴のことになると口調が歪む。

「連れて行け」

補助官に告げて牧本は取調室を出て行った。

戻された狭くひんやりとした留置所。

事件の凶悪性からか大西が入られているのは独居房だ。三畳ほどの狭い空間に便器と洗面所が設置されていて、寝具と机が端に置かれている。けして小柄ではない大西には、息苦しくなるような空間だった。

冷たい布団の上に大西は丸くなり、鈴の回復を願った。鈴が一言、犯人は大西じゃなかったと言ってくれれば、それですべて終わるのだ。

目覚めてくれ。

早く。  
目を覚ましてくれ。



## 第三章・1

### 第三章

—1—

「あの子はどうした」

「最近はそればかりですね」

「あの子はどうした」

大西が逮捕されてから、いつのまにか一ヶ月が経っていた。大西の容疑はいつこうに晴れないままだ。鈴が目覚めたという話もない。虚ろな目で繰り返す大西に、牧本はまた苦々しく言葉を歪めながら言った。

「私にも息子が一人います」

その言葉に、大西の瞼がぴくりと動く。

「まだほんの赤ん坊ですが同じ子をもつ親として、自分の子供がもし同じ目にあつたとしたら、犯人を憎んでも憎みきれないでしょう。もつとも、彼のご両親はすでに亡くなっています」

なるほど。だから鈴のことになると、この刑事は感情を隠し切れないのか。

大西にはそういう考え方はできない。子供がいるわけでもないし、両親の声を最後に聞いたのも、いつのことだったか覚えていないくらいなのだ。それ以前に、人とまともに接触したのもいつだったか忘れた。いつも自分のことを考えるだけで頭はいっぱいだった。

そして、それは今でも同じだ。

「あの子は、いつ目を覚ますんだ」

鈴が目覚めさえすれば、自分の無実は証明される。

もう一度同じことを問いかけた大西は、牧本の目に怒りの色が浮かぶのを見た。

「彼は死んだ」

牧本の言葉に、大西はぼやけていた焦点を牧本に合わせ、目をしばたかせた。

「え……?」

「牧さん!」

いつも大西の後ろに立っている大柄な刑事が、止めるように牧本の名前を口にする。

「おい、あれを持ってきてくれ」

「でも」

「いいから持って来い」

「……分かりました」

大柄な刑事は牧本に言われ一度取調べ室を出て行くと、新聞を手に戻ってきた。牧本はそれを困惑している大西の前に、ひどく乱暴に広げた。

びっしりと並んだ文字の中、少し控えめな一つの記事が目に残まり、大西はそれに鼻先が触れるほど顔を近づけ確認する。

## 【朝日奈一家の次男、死亡】

なんの面白みもないタイトルだった。

「先月初めに起きた“朝日奈一家惨殺事件”の唯一の生き残りだった朝日奈 鈴君（十五）が、事件から一ヶ月経った二月十日の深夜一時頃息を引き取った。鈴君は事件の際、マンションの六階から転落後意識不明だったが、病院に運ばれてから一度も目を覚ますことはなかった……」

記事を目で追う大西の頭上で、牧本が記事の内容を読み上げる。

「救急隊員が彼を病院へ搬送するときには、もう昏睡状態だった。一ヶ月よく持ったほうだ」

「そんな……まさか、こんな」

うろたえたように、けして長くはないその記事の文章を何度も目で追う大西を、牧本は冷ややかに見下ろしていた。

「何を震えている」

牧本の声に大西は新聞から顔を上げた。言われて初めて、自分の体が小刻みに震えていることに気がついた。絶望的な気持ちで牧本を見る大西に、牧本は少し顔を近づけると、ひどくゆっくりとした口調で言った。

「お前が、殺したんだろ」

足元が音をたてて崩れていくような気がした。底のない真っ暗な穴に突き落とされるような、そんな気が。

『……たすけて……』

あの時の鈴の音が頭に響き、両手でかきむしるように耳を塞ぐ。  
赤い口元。うつすら開いた自分を見つめる黒い瞳。コートの端を  
握りこむ幼い手。

あの夜の光景が目の前にちらつく。

罰が当たったのだ。

大きな罰が。

あの時、必死に助けを求めたあの子を見殺しにした罰が。

### 第三章・2

―2―

牧本は署内にある喫煙場所の、黒くて硬い長椅子に座っていた。胸ポケットから買ったばかりの煙草の箱を取り出すと一本咥え、ライターを探して背広を探る。その牧本の前にスツと安っぽいライターが差し出された。

「やめたんじゃないかったですか」

大柄な体がかめるようにして牧本の前に立っていたのは、牧本の下に就いている刑事で、名前を梶原といった。

煙草を咥えた口を前に少し伸ばした牧本に、梶原はライターの火を点けた。

牧本は一度深く肺に煙を吸い込むと、溜息とともに吐きだした。

「家じゃ吸わないさ」

「お子さん、もう二歳でしたっけ？」

「今年三歳になる」

「それは、可愛い盛りですね。牧さんもお子さんという時間が欲しいでしょう」

「うちのは、あんたは甘やかせてばかりって、いつも愚痴ってるよ」

苦笑いをした牧本に、梶原は快活な笑みを見せた。

「いい奥さんですね」

「家のことは心配なくていいから、あんたはさっさと事件を解決

してきなさいよ、なんてことまでいつてくる……私には出来すぎたカミさんだ」

惚気にしては色気のない物言いでそう口にすると、牧本はまた煙草を啜えた。

「……奴の初公判、いつになりますかね」

ふいに訊いた梶原の言葉に牧本の返事がないのは、煙草を啜えているせいではないだろう。

「状況証拠は揃ってるじゃないですか。奴が現場にいた物的証拠も目撃証言もある」

「しかし、それは朝日奈 鈴の周辺のみだ。肝心の殺害現場、マンシヨンの内部からは奴の痕跡は見つかっていない。マンシヨンの外にはあれだけの証拠を残しておきながら、だ」

「牧さんは大西が犯人じゃないと思ってるんですか」

「……分らんよ」

熱っぽく言う梶原に対し、牧本は相変わらずの口ぶりで答える。

> i 2 2 2 0 8 — 9 4 9 <

「慎重ですね、牧さんは」

「臆病なだけだ。この事件、奴が犯人だと決まれば、奴はおそらく死刑になるだろう。そして、それは当然だと思う。しかし、もし奴が犯人じゃなかったらと考えると怖いのだ。……梶。お前、朝日奈 鈴の死亡を聞いたときの奴の顔を見たか」

「ええ。あの話はちよつとまずかったんじゃない」

「責任は私が取るよ」

朝日奈 鈴は実際には死んではいなかった。

事件後しばらくして、捜査中の現場マンションに、人が入り込んだ形跡まで見つけられた。馬鹿なマスコミ連中の仕業だろうと警察は現場に監視の警官を置いた。しかしそれだけではなく、入院中の朝日奈 鈴の病室に誰かが侵入しようとした形跡まで見つかったのだ。

本当に犯人は捕まったのか。

本当の犯人はまだ鈴を狙っているんじゃないのか。

すごい剣幕で詰め寄る鈴の祖父に対し、警察は異例のマスコミ対策として鈴の祖父、陽一郎の要求を聞き入れた。鈴が死亡したという嘘の報道を流したのだ。

その後、おかしい現象は止まったため、やはりマスコミの仕業だったのだろうという話を、警察内ではしているが。

「何人死んだかは問題じゃない。私達は引き続き、この事件の真相を探るだけだ」

「やっぱり、牧さんはあいつが犯人じゃないと思ってるんですね」

鈴が死んだと聞かされたときの大西はひどく怯えていた。すべてを失ったような絶望感に満ちた顔。鈴の意識が戻りさえすれば自分は救われるのだと、本当に思っていたのではないかというような。

大西が犯人じゃなかったら……。

初動捜査で鈴の周辺から次々と見つかった証拠と、目撃証言。あつけないほど簡単に大西に結びついた。

そして大西の身柄も簡単に拘束することができた。それは本当に、

疑わしくなるほどあつけないものだった。

捜査の手を抜いていたとは思わない。しかし、目の前に簡単に差し出される証拠の数々に、もっと見なければならぬ大事な物を見落としている気がする。

もしも大西が犯人じゃなかったら。

事件からすでに一ヶ月が過ぎている。

牧本は短くなった煙草をスタンド灰皿に押し付け消した。いつの間にか胸の奥に、もやもやとした黒い煙が大きく広がっていた。



### 第三章・3

— 3 —

「二十六番、出ろ」

その番号がここで大西に与えられた名前だった。腰縄を付けられて取調室へ向かう。

もう何度も行き来した廊下の、窓から差し込む日差しがやたらと眩しい。大西は窓から顔を背けながら取調室に入った。

「ひどい顔だな」

椅子に座った大西を見て、牧本が言った。

「眠れなければ薬がもらえるはずだが」

眠れなかった。

眠りたくなかった。

目を閉じればあの日の出来事が蘇る。鈴が死んだと聞かされてからはずっとだ。

目の前に倒れている鈴が大西のコートを掴む。それを振り解くと、鈴はゆらりと立ち上がり、折れているはずの足を引きずりながら大西に近づいてくる。

『なんで助けてくれなかったの』

鈴は血の涙の流れる目で、哀しそうに大西を見ながら言う。  
耐え切れず逃げ出した大西の足に傷だらけの腕が絡みつく。

そんな悪夢を繰り返した。

「許してくれ……」

両手で顔を覆いながら呟いた大西に、牧本は机の上に身を乗り出すようにして腕を組む。

「今、なんて」

「俺が悪かった……」

「犯行を認めるのか」

「他は知らない。でもあの子に関しては……。あの子だけに関しては、確かに俺は見殺しにした。あの時、あの子はまだ生きていた。もしかしたら、すぐに助けを呼んでいれば……。病院に運んでいれば、あの子は助かったかもしれない」

大西の口から漏れた言葉は後悔だが、自白ではない。大西の後ろで息を詰めていた梶原に、牧本は小さく首を振った。梶原が悔しうに奥歯を噛み締めているのが、牧本には見て取れた。

「どうしてこんなことに……。俺はただ、写真を撮りに行っただけだったのに」

それが大西の仕事だったから。

「刑事さん。あんたは、なんで刑事になったんだ」

「うちは父が警察官だった。その父を見て育った」

「ああ……。そうか」

自分はまともに親を見たことなどあっただろうか。今、どうしているだろう。

「あなたは何でカメラマンに」

「……絵になるんだ。どんなもんでも。たとえ汚いものでも、くだらないものでも、写真にして切り取ると不思議とそれが魅力的なものに変わるんだ」

まだ学生だった自分の撮ったそれらを、見た人達がいいじゃないかと言ってくれるのも心地良かった。

「ファインダーを隔てて見る世界はリアルでもどこか嘘っぽくて……。あの日も目の前で起きていることは現実だったのに、俺には映画かドラマのワンシーンみたいに見えたんだ。こんな考えだから、俺はいい写真が撮れなくなったのかもしれない」

いつだって、現実とまともにぶつかりあうのが怖くて、いつの間にかファインダー越しの世界しか見れなくなっていた。

「……俺、カメラマンには向いてなかったのかもしれないな」

弱く笑った大西を、牧本は奇妙なものでも見るように眺めていた。



その日、いつものように取調室に入ると机の上にカメラがあるのが目に入り、大西の心はざわついた。

「それ……は？」

「借り物です」

言いながら、革の手袋をはめた手でカメラを取る牧本の手つきは、どう見ても不慣れで危なっかしい。思わず伸ばしたくなる手を、大西は机の下で握り合わせた。

報道系カメラマンの間でトップシェアを誇るメーカーのカメラに、二百ミリの大口径望遠ズームまでつけている。

いったい何をする気なのだろう。

「犯行当時、犯人は手袋をしていたとされています。朝日奈家からは犯人のものと見られる指紋は見つかっていない。マンションのエレベーター、階段の手すり、朝日奈家のあった六階を中心に他の場所の指紋も、念入りに調べましたが、空き部屋も多いとはいえ集合住宅。どの指紋が誰のものか見分けることはできない……やはり難しいな」

牧本はカメラを一度机に置き、手袋を外して再び手にした。フィルムを巻き上げる音がする。もうずっと聞いていなかった聞きなれたはずの音に、大西は懐かしさを感じた。

「慣れていない人間には、このフィルムの交換というのは意外とやっかいなものだな」

カメラを見る大西の視線に気づいてか、牧本はチラと大西を見ながらカメラの裏蓋を開ける。パカという軽い音がして開いた裏蓋の中から、牧本はフィルムを取り出した。

「あなたのようなカメラマンでも、商売道具はもちろん大切にしているんでしょう」

いつもと違って意図の分からない牧本の質問に、大西は当惑しながら頷いた。

「他人に自分のカメラを触らせたりしない」

「でしようね。あなたの自宅にあった数台のカメラからは、あなた以外の指紋は検出されなかった。一台を除いて」

「一台を除いて？」

「あなた以外の指紋がついていたカメラが、一台だけ見つかりました。たった一台だけ、あなたのものじゃない指紋がついていた」

牧本はフィルムを外したカメラの裏蓋を閉めた。

「我々は現場から犯人の痕跡を。犯人から現場の痕跡を探します。鈴君の握っていた釦からあなたのコートを。あなたの自宅のスニーカーから現場の花壇の土を、といった具合に。被害者と犯人の接点を見つけるんです」

カメラを机に置いて、牧本は続けた。

「あなたの大切なカメラにあった指紋が誰の物か分かりません。しかし、ある場所から見つかった指紋と、あなたのカメラに残されていた指紋が一致しました」

もし大西が犯人ではなかったら。

もし、犯人を撮ったというフィルムが存在したら。

小さな疑問から調べなおした大西の周辺から見つかった、誰のものか分からない指紋。

犯人であろう大西の持っていたカメラに、他人の指紋がついていても、気にする者などいなかっただろう。ましてや凶器でもないそ

れについた、被害者のものでもない指紋を事件に結び付けるなど。それでも牧本は適合する指紋を必死で探した。

結果、今回の捜査で採取した指紋の一つと、それが一致することが分かった。

「朝日奈家のあるマンション六階、非常階段入り口のドアノブにあった指紋です」

それが何を意味するのか。

あのマンション六階で非常階段を使った人物が、大西のカメラに触れたというのがどういうことなのか。

大西がポカンとしていると、牧本は悲痛な表情で口を開いた。

「なぜ……お前が犯人じゃないんだ」

牧本の口からこぼれ出た言葉は大西の無実を意味していたが、大西はなぜか少しも嬉しくはなかった。自分が犯人ではないことが、むしろ悪いことのような気がした。

もし自分が犯人なら、この事件はこれで終わるのに。

大西は俯<sup>うつむ</sup>いた。

「本当に……なんででしょうね……」

事件から一年が経とうとしていた。

雲一つない乾燥した晴天の日。

大西は釈放された。



## 第四章・1

### 第四章

—1—

アパートに戻った大西を出迎えたのは、ドアを覆い隠すほどの中傷の貼り紙や落書きだった。

『人殺し』『死ね』『お前が犯人だろ』そんな言葉で覆われたドアをこじ開けると、部屋の中では電話が鳴っていた。留守電に切り替わったそれに、押し殺したような声で吹き込まれるメッセージ。

『本当はお前がやったんだろ。人殺し』

そして切れた電話は、またすぐに鳴り始める。大西は電話のコードを引きちぎるように抜いた。

冤罪に対して、世間がすべて同情的かというところではない。自分のような人間には、これからも疑惑の目がつきまとうだろう。

大西はベッドに腰を下ろした。家宅捜査の入ったはずの部屋の中は、それほど荒らされた様子はなく、ただ一年近く人がいなかったためか、どこか微かに饅<sup>す</sup>えたような匂いがした。

そのとき、ドアのチャイムが鳴って、大西の心臓はビクリと跳ね上がった。

一年前、刑事が訪ねて来たことを思い出す。

「大西さん。こんにちはー」

なんだか馴れ馴れしい声がドアの外で大西を呼んだ。  
いったい誰だ。



「すみません。週刊活報の者です」

週刊誌の記者だった。

「いらっしやるんでしょう？ お話聞かせてもらえませんかね」

返事をしない大西に、チャイムが何度も続けて鳴らされる。

「あれえ？ 無実だったんでしょ。それとも何か、やましいことでもあるんですか。ねえ、大西さーん」

煩い。もう放っておいてくれ。

しかし、マスコミのしつこさは、大西自身が一番よく知っている。大西は布団を被ってベッドの隅に丸くなった。このまま眠りに落ち、一生目覚めなければいいのにと願う大西の気持ちとは裏腹に、いつまでたっても眠ることはできなかった。

釈放されてからも、大西の苦しみはずっと続いた。

何度も家に押し掛けて来るマスコミを避けるため、一日中カーテンを閉じた家に引き籠った。

一度、外したコードを繋ぎ直し、実家へと電話をしてみたが、その電話は呼び出し音すら鳴らなかった。

もしかしたら、自分に掛かってくるのと同じような電話が、実家の方にもあったのかもしれない。

もしかしたら、自分が知っているあの家から、どこかへもう引越してしまっているかもしれないかった。

人を煩わしいとばかり思っていた大西は今、世の中にたった一人での孤独に押しつぶされそうだった。

そして、やがて金が底をつき始める。

滞納していた家賃を支払ったせいで、貯金はあつという間になくなっていった。

元々、たいした稼ぎではなかったカメラの仕事は、もはや大西には入ってこなかった。

何より、もう、大西はカメラを手にする事ができなかった。大西の無実を証明してくれたのはカメラだったが、あの時、大西を狂わせたのもカメラだったから。

犯人の指紋のついたカメラは、今でも警察に保管されている。大西はそれ以外の家にあったカメラを売り払った。

すべてを売り払おうとしたが、結局一台だけは手元に残した自分をひどく女々しいと思った。

## 第四章・2

—2—

ある日、大西はバスに乗ってある場所を目指した。

夕方とはいえ、日のある時間に外に出るのは、久しぶり——釈放されてからすでに、また一年が経つほどだった。

マスコミは他の事件へと目を移し、世間ももう大西の事を忘れかけていた。

それでも、周囲の目が自分を見ているような気がして、大西は小さくはない体を丸めるようにしてずっと足元ばかりを見つめていた。自分の視界には、くたびれたスニーカーが踏みしめる地面ばかり。

最後に空を見上げたのが、いつだったかなんてことはもう忘れた。

目的のバス停で降りた大西は、ジーンズのポケットからしわくちゃのメモを取り出した。そこに書いてある住所へと歩き出す。

ずっと来ようと思っていた。

しかし、どうしても足を向ける事ができなかったその場所。

死んだ朝日奈 陽介の両親である、朝日奈 陽一郎の家だ。つまり、朝日奈 鈴の祖父に当たる人物である。

調べてみて陽介の妻、明子あきこの両親はすでにずいぶん前に亡くなっていることが分かった。陽介にも明子にも兄弟はいない。唯一残った朝日奈家の身内だった。

「蜃気楼……ここか」  
かいやぐら

その変わった名前の店は、和風の喫茶店らしい。雑誌にも載るほどの店だったらしいが、今、大西の目の前にある店はずいぶんとひっそりしている。

目の前は開けた空き地となっていて、大きな通りへと突っ切って行くことが出来る。

昭和初期の頃のようなレトロモダンな佇まいで、もしカメラを手にしていたら、一枚撮りたくなるような情緒ある雰囲気の良い店だった。

大西は店のドアの前に立った。そこには準備中の札が掛かっている。休みなのだろうか。

ドアに顔を近づけ覗き込むが、中は薄暗くてよく見えない。

仕方がない。出直そう。

少しがっかりし、また少しホツとしながら、大西は店の前から離れた。

店をぐるりと回り込む道を歩いていると、壁の向こう側からガチャンという何かが壊れる音がした。ハツとした大西は、そちらへ目をやる。

誰か居るのか。

どうやら庭となっている様子の壁の向こう。

大西は意を決し、丁度ゴミ捨て場となっているその壁際に、他のゴミと共に捨てられていた木箱に乗り、壁に手を掛けた。

これぐらいのことは、カメラマンだった頃には何度か経験がある。顔を壁の上に出し向こう側を見ると、綺麗に剪定せんていされた庭と縁側が見えた。そして、割れた植木鉢と、逃げ出そうとしている猫がこちらを振り向いている姿。

なんだ……猫か。

そう思ったときだ。

「こらあっ！　そこで何しとるか！」

背後で鋭い声がして、驚いた大西は壁に掛けていた手を放してしまった。

「うわっ」

バランスを崩し、そのまま置かれていたゴミの中に背中から落ちる。

「いっつつ……」

「誰だね、いったい。人の家を覗き込んで。事によっちゃ警察を呼ぶよ！」

ゴミに埋もれている大西の元へ、声は近づいて来る。

慌てた大西の目に、ゴミの中から黒縁眼鏡が落ちて転がったのが見えた。

「ま、待ってください。怪しいものじゃないんです」

大西はとっさに、その眼鏡を掛けてゴミの中から顔を上げた。

大西は目はいい方だ。度がキツめのその眼鏡に頭が一瞬くらりとする。

この後に及んで顔を隠したいと思うなんて、なんて臆病なのだろうか。

「本当に悪い奴だって、最初は皆そう言うものさ」

そこに居たのは、黒っぽい地味な着物姿の老婦だった。

しかし、背筋はピンとしているし、髪も綺麗にまとめられている。大酉を怒鳴りつけた声は若々しくハリがあって、どこか上品な雰囲気をもった老婦だった。

「俺はただ、この家の……あ、朝日奈陽一郎さんに会いに来ただけです」

「陽一郎さんに？」

「そうしたら中から何か壊れる音がしたから……」

すると老婦は目を細めて庭の方へ目をやった。

「ああ、またあの猫だね」

どうやら事情は分かってもらえたらしい。

「それで、あんたは陽一郎さんに何の用なんだい」

「そ、それは……」

口ごもる大酉に老婦はふふんと鼻を鳴らし、呆れたように大酉を見た。

「まあ、どうせあの人のことだ。またホイホイ金でも貸してたんだろう」

何か勘違いをされたようだ。確かに今の大酉の恰好は見窄らしく、いかにも金に困っているように見えただろう。まあ実際、そうなのだが。

「あの、あなたは陽一郎さんを知ってるんですか」

大西は先程からの老婦の口調に感じた疑問を訊いた。

「そりゃそうさ。私はあの人の妻だからね」

「え……」

言葉を失った。目の前の老婦は朝日奈陽一郎の妻、輝子てるこだったのだ。まさかこんな風に朝日奈家の者と対面することになるうとは。

「まあいいさ。あの人に会いたいっていうなら、おいで」

「ちょ、ちよつと……」

どうしようか。こんなはずではなかったのだが。輝子は完全に勘違いをしているし。

「なんだい。早くおしよ!」

店のドアの鍵を開けながら輝子が怒鳴る。

こうなったら陽一郎の前ですべてを話すしかない。順番が何か変なことになったが、元々そのつもりだったのだ。

大西は輝子が入った店のドアから、続けて中へと入った。



「陽一郎さん。あなたにお客様ですよ」

輝子に通されたのは、店の奥にある階段を上上がった部屋。ど

うやら店の二階を住居としているようだ。外観と同じく、どこか洋風な趣のある内装だ。

その居間に朝日奈 陽一郎はいた。  
人の良さそうな丸い顔が微笑みながら大西を見ている。

「……いつ……ですか？」

大西は震える声で輝子に尋ねた。

「先週、四十九日を終えたばかりだよ」

居間の壁際、焦茶色の木製チェストの上に置かれた小さな仏壇。  
そこに陽一郎の写真が位牌と共にあった。その隣には、朝日奈 陽  
介一家の家族写真も飾られている。

「どうして……」

「脳溢血。夜布団に入って、朝になってもそのまま、ずっと起きて  
来なくてね」

遅すぎた。

大西は愕然として仏壇の前に膝をついた。



## 第四章・3

— 3 —

「それでいったい、あの人はいくら貸したのかね」

輝子は茶を入れると、大西の前に腰を下ろした。

居間の応接セットも昭和モダンな革張りのソファに曲線の美しい足のテーブルと、この部屋によく合っている。そのテーブルに置かれた香ばしい香りに、大西の気持ちがほんの少し安らぐ。

「いや、その、俺は……」

「まあ、その恰好じゃ、出世払いに来たって訳じゃあなさそうだけどね」

目の前にしゃんと座る老婦よりも老人のように、背中を丸める大西の姿はどう見ても、金を返しに来たというよりは借りに来た人間のように見える。

「陽一郎さんが勝手にしたことだから、別に私は構わないけどね。本人ももういないんじゃない、仕方がない」

「いや、俺は……」

輝子はすっかり大西を、陽一郎に借金した男と決め付けてしまっているようだった。どうやら陽一郎にはそういうことがよくあったと思われる。

輝子は自分の顔を知らないのだろうか。息子夫婦一家を殺した容疑のかかっていた男だ。罪が確定する前とはいえ、新聞にも雑誌にも顔写真は載ったはず。

確かに、この二年でかなり体重が減り、頬もだいぶ扱けてはいるが……。この黒縁眼鏡のせいもあるのだろうか。

「とにかく、今日はちょっと忙しいんだよ。もう日も暮れたしね。悪いけどまた出直しておくれ」

「……………それじゃあ……………」

今、ここで帰ったら、もう二度とここへ足を運ぶ気力など湧かない気がする。しかし、目の前の老婦の静かな威圧感に、大西はのろのろと立ち上がった。

一階の店へと下りるため、先ほど上がってきた階段へと向かう。すると、ガチャンと瀬戸物がぶつかり合うような音がして、大西は後ろを振り返った。見るとテーブルの盆の上、先程大西に出された湯呑みがひっくり返っている。

そして、それを片付けようとしていたであろう輝子が、テーブルの脇に膝をついて、苦しそうに胸を押さえていた。

大西は戸惑いながら輝子の傍へと戻った。

「ど、どうしたんですか」

「薬……」

「薬？ どこに」

「台所の…………戸棚の左側に」

息苦しそうに言う輝子に、大西は台所の戸棚を探す。

「これ？」

見つけた小さな瓶に入れられた錠剤を見せると、輝子は手を差し出した。寄越せということだろうか。

大西は瓶を開け、中身を手の平に出す。

「いくつ」

訊いた言葉に指が二本立てられる。輝子に二粒の錠剤を渡すと、

「水くらい持って来れないのかい。気の利かない子だね」

息苦しそうな声で輝子が言った。

そんなことを言われても……。

大西は思いながらもまた台所へと急ぎ、コップに水を入れて輝子に差し出した。輝子は薬を口に含むと、大西の手からコップを取り水を飲み干した。

「大丈夫……ですか」

「この歳だ。どっかしら悪くはしてるもんだよ」

心配する声を掛けるが、そんな風に素っ気なく返される。少しよろめきながら立ち上がった輝子に、大西は手を貸した。

「悪いけどね、寝室まで連れて行っておくれ」

「病院とか行ったほうが……」

「そんなとこ行って何になるさね。出来るなら早いところ、迎えが来てほしいくらいさ」

輝子の口調は本気なのか冗談なのか、よく分からない。

輝子の手を引きながら奥の部屋へと入ると、そこはこじんまりとした寝室だった。ベッドが二つ。片方は陽一郎の物だったのだろう。その一つに輝子は座り、着物の帯を緩める。

「あの……」

このまま帰ってもいいのだろうか。

この家には今、輝子一人。また今みたいな事があつたらどうするのか。

帰るタイミングを損ねて、大西がまごついているとベッドに座ったまま輝子が言った。

「ああ、そうだ。ちょっとあんた。ついでだ。屋上に干してある洗濯物を取り込んで来てくれないか」

「は？」

「玄関を出て階段を上がって。三階は人に貸してるからね。その上  
が屋上。ほら、ちんたらしないで早くおし。日はとくに暮れて  
るんだよ！」

強い語尾に、大西は慌てて部屋を出た。

ついでに洗濯物を取り込め？　　いったい何のついでだ。

そんなことを思った大西だったが、輝子にとって今、自分は陽一郎に借金をしている人間。それくらいはするべきなのだろう。

玄関を出るとコンクリ造りの廊下。床がタイル張りなのが珍しい。黄ばんだ蛍光灯の光が暗いそこを静かに照らしていた。一段が高い階段を三階へ上がると、すぐ近くにドアがある。何かの事務所のようだが、磨りガラスのはめ込まれたドアに書かれた文字は、掠れていてよく読めない。明かりがもれているから、まだ中に誰かいるのだろう。

> i 3 0 8 5 8 — 9 4 9 <

さらに階段を上に行くと、鉄のドアが見えた。少し重たいドアを押すと冷たい外の風が吹き込む。一気に開けたドアの向こうにあ

った空間は、大西の想像よりもずいぶん広かった。

すっかり暗くなった空の下、住宅街の明かりがちらほらと眼下に瞬いている。

物干台は屋上の中央付近にあり、タオルやシャツが風にはためいていた。当たり前かもしれないが、輝子の物と思われる下着もある。なんで俺がこんなことを。

思いながら大西は手早く洗濯物を手に集めた。

大きなバスタオルを二枚物干から引っ張ると、だいぶ腕がいつぱいになる。ふと見れば、ドアの横には木製のベンチがあり、スチールワイヤーで出来たカゴが置かれているのに気がついた。

いつもこれを使っているのだろう。

カゴにバスタオルを突っ込むと、残りの洗濯物もどんどん放り込む。全てを取り込み終わると小さくはないカゴは、洗濯物でいっぱいになっていた。

それを抱えて先程の階段を下りる。大西にとってはたいした事のないことではあるが、これは年寄りには重労働なのではないかと感じる。

「取り込んできたけど……これ、どこに」

カゴを持ったまま、輝子の部屋に戻ると、輝子は寝間着に着替え上半身を起こした状態でベッドに入っていた。輝子は部屋に入って来た大西に顔を顰めた。

「なんだい。人の部屋に入るときはノックぐらいするもんだよ。それに、ああ、ああ。もう。そんなにぐしゃぐしゃに押し込んで。しわくちゃになっちゃうじゃないか」

せっかく取り込んできたのに、言われるのは文句ばかり。

「まったく。中学生のうちの孫でさえ、洗濯物を畳むくらいちゃんとできたっていうのに」

輝子の言った言葉に、大酉は腹の辺りがちくりと痛むのを感じた。嫌味の込められた口調と言葉のせいではない。中学生の孫というのが鈴のことだからだろう。

仕方なく大酉は慣れない手つきで洗濯物を畳み始めた。

自分は洗濯物なんて、干したらそのまま壁にぶら下げて、使うときもそこから取っていたので、ちゃんと畳むなどということはあまりしなかった。

「それが終わったら、さっき開けた店のドアを閉めて来ておくれ。ああ、そういえば庭に猫が入ったって言ってたね。それも片しておいてもらおうか」

「ちよっ……」

さすがに抗議の声をあげようとした大酉だったが、輝子はさっさと布団を被り大酉に背を向けてしまった。

何かがおかしい。こんなはずではなかったのに。

しかし、確かに店のドアを開けっ放しにしておく訳にもいかないだろう。

少し苛つきながらも、なんとか洗濯物を畳み終え、大酉は一階の店へと下りて、先程、輝子が入った店のドアの鍵を掛けた。

あとは植木鉢。なんで自分がそこまでしななければならないのかとも思う。それでも大酉は店の奥の座敷部屋に上がった。テーブルが一つあるだけの六畳ほどの和室。その奥、障子の向こう側に、さっき壁に手を掛け覗き見た裏庭があった。

猫が引っ掛けたと思われる植木鉢は割れて、中の土がこぼれているのが見える。溜息をつきながら、縁側の下にあったサンダルを履いて庭に出た。

片付けろと言われても……。

どこかに箒でもあるのだろうか。探してみたが見当たらない。大酉はしゃがみ込むと手で植木鉢の破片を集め、一つにまとめておいた。こぼれた土も手でかき集め、空いていた別の植木鉢に入れておく。

とりあえずこの程度でいいだろう。

汚れた手を店のトイレの洗面台を借りて洗う。

輝子の部屋に戻りドアを開けようとして、注意されたことを思い出しノックをする。すると、今度は輝子の返事がない。

「あの――」

少しためらいながら、大酉はドアをそっと開けた。

「片付け終わったんだけど……」

声を掛けるが、やはり輝子の声は返ってこない。見ると、輝子は静かな寝息を立てていた。そんな輝子が少し腹立たしかったが、これで帰れると大酉は輝子の部屋を出ようとした。

そして気づく。

待て。自分はどこから帰ればいいのだろう。

一階の店のドアはもう閉めてしまった。

また開ける事はできるが、大酉が出た後に今度は閉めることができない。そしてそれは、この玄関でも同じ事。

「もしもし、ちょっと……起きてくれ」

しかし輝子はすっかり眠り込んでしまっている様子。

なんて不用心なんだ。もういい。どうせ一晚だけのこと。このまま帰ってしまえばいいんだ。

輝子の部屋を出た大西は、ふと居間の仏壇に目をやった。

近くに寄り、先ほど見た家族写真を改めて見る。羨ましくなるくらい仲の良さそうな家族。この家族が、すでにこの世にはいないとは。中でも鈴の笑顔には息苦しさを覚えた。

背の高い兄に肩を組まれながら、カメラにピースサインを向けている子供っぽい笑顔。

あの日、この笑顔が苦痛と絶望に歪んでいた。この手が大西のノートを掴んでいたのだ。

大西は玄関に向かうと鍵を閉めた。

今夜一晩だけ、ここにしよう。

明日の朝一番に帰ればいい。

どうせ、自分の帰りを待っている者など誰もいやしないのだから。



## 第五章・1

### 第五章

—1—

「大西圭介！」

突然大きな声で呼ばれた自分の名前に、大西の心臓は跳ね上がった。次に床に転がり落ちて、打ち付けた肘に顔を顰め呻く。

「まったく、いつまで寝てる気だい」

見れば、輝子が腕を組みながら自分を見下ろしている。ちゃんと着物に着替え、髪もしっかりと結いあげられている。今日の着物は昨日とは違って、萌葱色の優しい色合いだった。

大西は落ちた眼鏡を慌てて掛け直し立ち上がった。どうやら昨日ソファに座ったまま、いつの間にか眠ってしまったらしい。そういえば

「……俺の名前」

輝子は今、大西の名前を口にした。

「やれやれ。本当に、まともな生活をしてとは思えないね」

そんなことを言う輝子の手になっている物は――

「俺の財布！」

「そんな声出さなくても、取りやしないよ。小銭しか入ってないじゃないか」

投げ返された二つ折りの財布には、確かに小銭しか入っていないが、免許証も一緒に入れてある。

「二十八にもなってそんなんじゃない、親御さんもさぞかし苦労されてるだろうよ」

「親にはとっくの昔に勘当されてるから……」  
「ふうん」

輝子は目を細め大西を見ると、寢室の隣の部屋へと入って行った。どういうことだろう。

顔だけではともかく、大西の名前まで知って、何も言っていないなんて。

まさかとは思うが輝子は本当に自分のことを知らないのか。  
考えていた大西の前に、輝子が戻って来た。そしてぐいと何かを押し付けられる。

「これは」

「陽一郎さんが若い頃に着ていたものだ。さっさとお着替え」  
「え」

どういう事なのかさっぱり分からない。

「陽一郎さんが勝手にした事だからと思ったけど、気が変わった。  
陽一郎さんに借りた分、あんたには身体で返してもらおう事にしたよ」

やはり、相変わらず輝子は大西を、陽一郎から金を借りた男だと思っ  
思っているらしい。

「今日から店を再開する予定でね。ちょうど男手が欲しかったところだったんだよ」

「いや、でも」

「なんだい。他にあてがあるのかい。その成りじゃ、どうせろくに仕事もしちゃいないんだろ」

それは凶星だが。

「着替えの前にまず、湯でも浴びておいで。まったく小汚い。そんなじゃ、店に出せないじゃないか」

昨日、突然苦しみだしたとは思えないほど元気な老婦は、ぐいぐいと大西を浴室へと追いやった。

「隅々まで、ちゃんと綺麗になるまで出てくるんじゃないよ」

ボタンと戸を閉められ一人になると、改めて輝子の勢いに呆氣に取られる。

輝子は大きな勘違いをしている。大西は陽一郎に金を借りてなどいない。しかし、自分に今仕事がないのは事実だし、この家にはもう輝子一人しかいない。人手が必要というなら、自分は輝子の言う通りにするべきなのかもしれない。

それで多少なりとも、輝子の役に立てるなら。

もはや一人ぼっちになってしまった輝子に、あの日、助かるかもしれないなかった彼女の孫を見殺しにした罪を少しでも償えるのなら。

大西は服を脱ぐと、風呂場へと入った。

また輝子に何か言われないようにと、これでもかというくらいに身体隅々まで石けんを泡立てたタオルで擦り、癖のある髪は二度

洗った。

置かれていた剃刀をざらついた顎に当てる。熱いシャワーを浴びて風呂場を出た大西を次に悩ませたのは、輝子から着替えろと渡された服だった。

「着れるわけないだろ……」

陽一郎が若い頃着ていたというそれは、和服だったのだ。着方などまるで分からない。

とりあえず長襦袢と長着の袖に腕を通し、帯で適当に縛り付け浴室を出た大西を出迎えたのは、輝子の呆れたような視線と盛大な溜息だった。

「みつともないね。最近の若い子は着物一つちゃんと着れないのかい」

言うなり輝子は大西の帯に手を掛けた。

「ちょ、ちょっと」

「じっとしておいで。合わせさえ間違ってるじゃないか。うちの孫は、これぐらい一人で着れたよ」

また孫と比べるようなことを言いながら、怒る輝子の言葉に仕方なく抵抗をやめる。

「ほら、もつとしゃんと立ちな。……なんだい。意外と背が高いじゃないか」

丸めていた背を伸ばした大西に言いながら、慣れた手つきで大西に着物を着せて行く。

人に服を着せられるなんて、まるで小さな子供にでもなったように、大酉は落ち着かない気持ちにさせられる。

輝子が黙ってしまおうと、聞こえてくるのはシュツシュツという木綿の生地が刷れる音だけ。

古い物のはずのその着物は、パリッと糊が効いていて折り目も正しく、きちんと着せられると身が引き締まるような気がした。さらにとした肌触りも心地良い。

最後に腰紐の端を捻り絡げ止めると、輝子はパアンと大酉の尻を叩いた。

「いっ！」

思わずよろけた大酉に、襷と黒い前掛けが投げ渡される。

「さあ、まずは店の掃除だよ。テーブルを拭いて、それから床にモップを掛けて。布巾は厨房の奥。モップと箒は裏口を出た所。最後に忘れず店の外もちゃんと掃くんだよ！」

まくしたてられるように言われ、前掛けを手に大酉は一階へと駆け下りて行った。

ふと店の柱に掛けられた古い時計を見れば、まだ針は六時を少し過ぎたところ。大酉は一つ大きく息をつく、前掛けを腰に結びつけた。

小さな店だからと鷹を括っていた大酉だったが、全てを終えたのは、たっぷり一時間以上後のことだった。

店の外を掃き終わり中へと戻るとそこには、輝子が腕を組んで立っていた。

「あ、今終わったところで……」

「まったく、ちんたらした仕事だね。そんなじゃ日が暮れちまうよ」  
そして輝子は大西が拭いたテーブル、モップを掛けた床をチラリと見て呟く。

「五十五点」

……厳しい。

「明日からはもっとテキパキ頼むよ。さあ、手を洗っておいで」

言いながら輝子は二階へと戻って行った。言われた通りに手を洗って来た大西の前に用意されていたのは、出来たての和風の朝食。

「何ぼさつと突っ立ってるんだい。早くお座り」

「いや、でも……」

「朝はしっかり食べないと、頭がしっかり働かないんだよ。そんなことも知らないのかね」

また怒られた。

「あんたには目一杯働いてもらわなきゃならないんだから。ほら、早く食べなさい。洗い物は頼んだよ。それが終わったら、ここの掃除と洗濯もあるからね」

先に席についた輝子が手を合わせるのを見て、大西も席につく。

「じゃあ……いただきます」

言った言葉に返事はなく、味噌汁を口元へ運ぶ輝子に習うように

大西は自分も味噌汁の椀を手にした。

ちゃんとダシをとった味噌汁のいい香り。具はわかめと麩のシンプルな物。出来立ての湯気を立てるそれに、二、三度息を吹きかけずすると、じんわりと腹が熱くなる。

かつて自分にも、こういった母の味というものがあつたというのとすら記憶に薄いが、それはひどく懐かしさを感じさせる味だった。

## 第五章・2

―2―

朝食を食べ終わると、輝子は店へと下りて行った。

その輝子の分の食器も一緒に大西は食器を片付け、言いつけられた通りに洗濯を始める。とは言っても、洗濯機の中に入っているのは、輝子の下着と先程大西が使ったタオルだけ。洗濯機脇のカゴには大西の服しか入っていない。一緒に洗ってもいいものか迷ったが、面倒なので大西は自分の服も洗濯機に放り込むと、洗剤を入れてスITCHを押した。

後は掃除。見る限り、掃除をしなければならぬところなどないように思えるほど片付いている。しかし、御丁寧に箒と雑巾が居間に用意されていた。

掃除機はないのか……。

顔が渋るのを自覚しながら、大西はしぶしぶ箒を手にとった。

外は清々しいくらいに晴れ渡っていた。

昨夜は暗くてよく見えなかった屋上で、大西は鼻の上にずり落ち気味に掛けていた眼鏡を外すと、腰帯に引っかけ空を見る。

抜けるような青い空がどこまでも高く広がっている。乾いた空気を時折、冷たい風が静かにかき乱し、頬を撫でるのが心地良い。

これならば、洗濯物なんて昼を過ぎる頃には乾くのではないだろうか。

大西は濡れたバスタオルを物干竿に引っ掛けた。朝からこんなに体を動かしたのは久しぶりだ。もともと不規則かつ、夜の方が仕事の多かった大西には、朝の太陽の光はひどく目に痛かった。

少ない洗濯物を干すのに、たらたらとあまり時間を掛けてもいら



れないだろう。

大西はかごの中から次の洗濯物を手に取った。

言いつけられた仕事をすべて終え、大西は輝子の姿を探した。

店の奥の厨房から物音が聞えてきて、大西はそちらへと向かう。

「終わったけど……」

顔を覗かせた大西に、割烹着を着た輝子が作業の手を止め大西を睨む。

「“終わりました”だろう。それが雇い主に対する口の利き方かい」  
「す、すいません。終わりました」

「ぼそぼそと喋るんじゃないよ。声はもっと腹から出しな。うちは客商売なんだからね。ほら、また背が丸まってる！」

輝子の勢いにうろたえながら、大西は背筋を伸ばす。

「ちょっとそこにお座り」

「は、はい」

厨房の端にあった椅子に腰を掛けた大西は、近づいてくる輝子に身を固くする。輝子は短い紐を口に咥えると、大西の背後に立った。

「なんです……あ、いってててっ」

髪を引っ張られ、喉を反らしながら大西は言った。

「じっとしておいで。うちは食べ物を扱うんだから。だらしく髪

を垂らしてたんじゃ不潔だろう。……ずいぶん癖っ毛だね」

「分かった。分かりました！ 自分でやりますから。痛い！ 禿げる！」

「そうかい。じゃあ、ちゃんとまとめるんだよ」

髪留めの紐を大西に渡すと、輝子はまた手を洗い、調理台の前に立つ。

頭皮ごと持っていられるかと思った……。

大西はトイレへと行くと、鏡の前で少しだけ長い髪を後ろで小さくまとめた。着物姿で丸眼鏡の髪を結んだ男。鏡に映った自分はまるで別の人間のようなのだ。

このまま別人になってしまえたら、どんなにいいだろう。

「大西！」

「はいっ！」

鏡の前でぼんやりしていると、輝子の鋭い声がしてきて、大西は急いで厨房に戻った。



「……不器用な子だね」

厨房で白い大福の生地を餡を包む大西の手を見て、輝子が感心するように言った。

「こんなのやったことないし、仕方ないでしょう」

「口答えするんじゃないよ」

「……すいません」

作っているのは豆大福だ。食べたことがまったくないわけではないが、大西にとってそうそう食べる機会なんてないものだ。もちろん作ったことなんてあるわけがない。

「孫の鈴はもっと上手にやってみせたよ」

何気なく言われた言葉に大西の手が止まる。

「ほら、ここはもういいから。看板を出してきておくれ」

「……はい」

胸がむかむかとするこの気持ちには、罪悪感だろうか。輝子は自分があの日、その孫を見殺しにした男だと知ったら、どうするのだろうか。

大西がドアに下げられた『準備中』の札を『営業中』にひっくり返し、日が暮れば明かりのつく電飾の看板を店の外に出していると、誰かが店の前で足を止めた。

「ほお、今日からまた営業再開かい」

杖をついた小柄な老人が、杖を持っているとは逆の手で顎の白い鬚を擦りながら店を見ていた。

「はあ。そうらしいです」

「そうか。それはいい。ちょっとお邪魔していくかな」

老人は大西の脇を抜け、店のドアを押した。カラランと響くドアベルの音に輝子が厨房から顔を出す。

「あら、中井さん！ お久しぶり。その節は御世話になって」

「いやいや。今日からまたやっているとということで、早速テルさんのお茶が飲みたくなってしまった。いいかね」

「ええ。もちろん」

どうやら老人は中井という名で、この店の常連のようだ。笑顔で中井と話していた輝子だったが、ふと大西を見て、また眉を吊り上げる。

「お客様がお見えになったら、店の中にご案内くらいしなさい」

叱る声が少し控えめなのは客の前だからだろうか。

「はっは。まあまあテルさん。このお若いのは、今日が仕事始めなのだろう。そんなに怒鳴りつけては可哀想だ」

「中井さんはいつも、そうやって若い子に甘いんですから。うちの鈴はそれぐらい、言われなくなっただけでできてましたよ」

ああ、また鈴の名だ。

「やあ、またテルさんの『うちの鈴』だ」

ドアベルの音と共に、そんなことを言いながら入って来た者がいる。

「いらっしやい、山本さん」

「久しぶり、テルさん。私にもお茶を。それから今日の菓子は何かね」

中井ほど歳ではないが、恰幅のいいその初老の男もまた、店の馴染み客らしい。

「今日は豆大福ですよ」

「そりゃあいい。一つもらおう」

それを聞いて輝子が厨房へと姿を消すと、山本と呼ばれた男は大西の背をポンポンと叩いて、中井の座っていたテーブル席に、自然な様子で相席をする。

「ありゃあ、テルさんの口癖だからね。気にしないこったよ、兄ちゃん。なんせ『うちの鈴』君には誰も敵わないんだから」

山本が言った言葉に、中井も笑った。この客たちも鈴の事を知っているのか。

「その鈴っていう子は……」

大西が訊こうとしたときだ。

「大西！」

輝子の呼ぶ声に慌てて厨房へと向かう。

「無駄口叩いてないで、お客様が席に着いたらまず、おしぼりを運びなさい。ほら、お茶も入ったから」

「はい……」

竹で編まれた籠に置かれたおしぼりと、輝子が入れた茶を盆に載せる。なんとも心落ち着く香りの豊かな緑茶だ。

「えっと……お待たせしました」

「はい、どうも」

慣れない大西の接客態度にも、中井と山本はにこにここと笑っている。そのとき、またドアベルが鳴った。

「テルさん。今日から営業再開？」

突然、そんなことを言って入ってきたのは、少し太った中年の女性だった。そして大西を見るなり、目を丸くする。

「あらあ！ 若い男の子がいるじゃない。ちょっとテルさん！ どうしたの、この子」

「今日から、うちで雇うことにしたんですよ」

輝子がカウンター席に座った女性に、おしぼりを持ってきながら答える。

「まあ。それは嬉しいねえ。ここはお茶もお菓子も美味しいけど、じいさん連中が多いから」

「悪かったな、じいさんで」

山本が苦笑する。

「ほらほら、よく見たら、結構いい男じゃないのさ。お兄さん、お名前は」

「あ……俺は大西と……言います」

「大西？」

首を傾げる女性に大西は少し息を詰めるが、

「変わった名前ね」

女性があっさりとそう言ってホッとする。しかし輝子が自分を睨んでいるのに気がついた。

「俺」だなんて。ちゃんと“私”と言いなさい。いい年した大人がみっともない」

そこか。

「あら、テルさん。鈴君だって“俺”って言ってたわよね」

「まったく、お兄ちゃんの光だって僕って言ってたのに、なんでか、あの子はあれだけは直らなくてね」

「そこが可愛いんじゃない」

「まったく、宮田さんは鈴君に甘いな」

「そういう中井さんだって」

宮田というらしい女性は、笑いながら言った。

店の客が皆、鈴の話をしている。ここにいる客は鈴のことをよく知っているようだ。そして、まるでまだ鈴が生きているかのように鈴のことを口にする。

大西がふと見た輝子は、そんな客たちを見ながら静かに微笑んでいた。

## 第五章・3

— 3 —

夜、七時を回った頃、看板を仕舞うように言われて大西は外へ出た。外はもう真っ暗で、一日というのは、こんなにあっという間に終わるもののだと驚く。

この日、店は大西が思っていた以上に忙しかった。

午前中は、それこそ中井や山本のような、茶飲み友達と思われる年寄りが来るだけだったのだが、昼を過ぎた辺りからは一般客もやって来た。中には、菓子だけを包んでくれという持ち帰りの客もいたりして、大西は慣れない人を相手にする仕事に、すっかり疲れきっていた。

看板を仕舞いドアの札を裏返すと、お茶のいい香りがしてきて振り返る。

「そこにお座んなさい」

輝子がお菓子とお茶のセットを一つ持ってきて、テーブルに置いた。

「お食べ」

キョトンとしている大西に、輝子は言った。

「でも」

「売れ残りだ。あんたが作った大福だよ。片しておくれ」

「……はい」



見た目のいまいちなそれは、大西が包んだものらしい。それならばと遠慮なく一口頬張る。

厚みのある餅はきめ細かく、弾力があるが歯切れよく食べやすい。素朴なえんどう豆の塩気が、上品な甘みの餡を引き立てている。あつという間に一個食べ終え、少し物足りなさを感じる。もう一つ、二つくらい食べられるのではないかと思えるほどで、一言で言えば――

「どうだい」

輝子の声に大西は皿から顔を上げた。

「美味かったです……」

輝子は大西の返事に満足そうに、また当然というような顔で立ち上がった。

> i 3 0 8 5 9 — 9 4 9 <

「疲れたときには甘いもんが一番さ」

そう言って二階へと向かう輝子。

売れ残りだなどと言っていたが、もしかしたら輝子ねぎらなりの労いだったかもしれない。輝子の入れてくれた茶に、大西は肩の力が抜けるような気持ちがしてソファに背中を預けた。すると――

「ちゃんとテーブルを拭いて、床のモップ掛けも忘れるんじゃないよ！」

階段の方から輝子の鋭い声が響いてきて、慌てて大西は立ち上が

った。



店の掃除を終え二階へと戻ると、輝子が寝室の隣にある部屋から出てくるところだった。

「あ、店仕舞い終わりました」

「そうかい。ご苦労様」

「何……してたんですか」

「ちよつと片付けをね」

首を捻って、輝子の後ろにあるその部屋を覗きこんだ大西に、輝子は今日洗濯した大西の服を手渡しながら言う。

「その部屋、好きに使うといい」

「え」

「とは言っても、必要なものもあるだろう。今日は一度家にお帰り」

「ちよつと、待ってください」

「明日も今日と同じに店を開けるからね。遅刻は許さないよ」

相変わらず一方的に話を切り上げると、輝子は浴室の方へと行っってしまった。

住み込みで働けということか。もちろん、今朝のように朝の早い仕事なら、住み込みの方が都合がいいとは思うが。それに、アパートの家賃を払うのも苦しい大西にとっては、願ってもない話ではある。

それでも、輝子と一つ屋根の下で過ごすことになるのは気が重い。

迷いながら大西は着物を着替えると、玄関を出て蜷気楼を後にした。

一日空けていただけの部屋に返って来た大西は、ドアを開けた瞬間に吸った、自分の部屋のカビ臭い空気に思わず顔を顰めた。

我ながら、ひどい部屋だ。蜷気楼で一日過ごして、住み慣れたはずの我が家の環境の悪さを思い知らされる。

湿気たベッドに寝転んで考えた。

このまま明日、大西が蜷気楼へと顔を出さなければ、輝子はどう思うだろう。

そうだ。このまま、もう二度と蜷気楼に近づくのはやめよう。

あそこにいるのは息苦しい。あれをしろ、これをしろと言いつけられるのも、出される美味しい食事も、店の客から向けられる笑顔も、耳に入る鈴の名前も、大西の喉をゆるゆると締め付けるようだ。

そのまま眠りに落ちようとした大西はふと思い出した。

輝子は大丈夫だろうか。また急に発作など起こしていないだろうか。あの家には輝子しかないのだ。

昼間、店を開ければ客は来る。しかし店を閉めてしまえば、あの老婦は一人きり。何かあっても気づく者はいないだろう。

大西はむくりと立ち上がると、クローゼットの奥からドラムバッグを取り出し、中にまともな服を詰めた。わずかな残額が記載された通帳と判子、他に何が必要かと考えるが思いつかない。

最後にぐると部屋を見回すと、処分せずに残したカメラが目に入った。それをバッグの中に押し込むように入れると、大西はアパートを出て行った。

## 第六章・1

### 第六章

—1—

「大西」

「はい」

輝子の声に大西は作業の手を止めた。その大西の手元を輝子が覗き込む。

大西が作っていたのは茶饅頭。黒糖、黒蜜を練りこんだ生地は粘りがあり、扱うのが難しいのだが、

「なかなか上手になったじゃないか」

輝子が言った言葉に、大西は気恥ずかしそうに目を逸らす。

大西が蜷気楼で働き始めて、二ヶ月が経とうとしていた。アパートは解約し、今では蜷気楼の二階の一部屋で寝起きしている。

朝の早い生活にも慣れてきたし、菓子作りの手伝いもそれなりに覚えてきた。自由な時間は一切なかったが、不思議とそれはあまり苦痛ではなかった。

「それじゃあ、私はちょっと出かけてくるから、後は頼んだよ」

大西は驚いて、逸らしていた目を輝子に向けた。見れば輝子は着物ではなく、ブラウスにニット、ズボンを穿いた姿でコートを手にしている。

この二ヶ月の間、病院へ行ったり買い物へ行ったりと、輝子が外

出することはもちろんあった。しかしそれは、店が休みのときで、大酉に店を任せて出かけるなどということはなかった。

「あの、でも」

「なんだい。何か問題でもあるのかい。うちの鈴だって、店番くらいは一人でできたよ」

輝子の口からは相変わらず、こうして鈴の名前が時々出る。これには二ヶ月経ってもなかなか慣れない。

「分かりました。いつてらっしゃい」

「昼過ぎには戻るよ」

「はい。気をつけて」

会話というものにも、だいぶ慣れたと思う。

輝子が出かけてしばらく経った頃、店のドアベルが鳴って大酉は厨房から店先へと出た。

「やあ、おはよう大酉君」

「いらっしゃい中井さん」

いつも笑顔の中井に、返す笑顔も自然と出るようになった。

「おや、テルさんは」

「今日はちょっと出かけています」

いつも同じ席に座る中井に、大酉はおしぼりを出す。

「そうか。それはしっかり店番をしないといけないね」

「ええ。今、お茶をお持ちします」

「ああ。しかし、何やらいい匂いだ。これは茶饅頭じゃないかい」

「はい。ちょうど蒸しあがったところですけど」

「じゃあ、それも頂こうかな二つ」

「かしこまりました」

蒸しあがったばかりのふっくらと艶のある饅頭と、一緒に持っていくのは香ばしいほうじ茶。

「ごゆっくり」

「大西君」

菓子を出して下がろうとした大西を、中井が呼び止めた。

「はい」

「まあ、少し座らないかね。この時間なら、他に客が来たとしてもいつもの連中じゃないか」

「いや、でも」

「テルさんには黙っているから平気だよ」

「……それじゃあ」

大西は躊躇いながら中井の前に座った。その大西に中井は饅頭の一つを差し出す。どうやら初めから、一つは大西にやるつもりで注文したようだ。

「いえ、さすがにそれは」

「いいからいいから。鈴君が店番をしているときも、私はこうやってよく、お菓子をご馳走してあげてたんだよ」

笑いながら言った中井に、大西は饅頭を受け取った。中井は嬉しそうに自分の饅頭を一口大に千切り、口に入れる。

「あの、中井さん」

「何かね」

「その……鈴君って、この店によく来てたんですか」

「ああ、君は鈴君のことをよく知らないのか」

中井は顎の鬚を撫でた。

「そうだね、鈴君が十歳くらいのときからかな。日曜には朝からよく来ていたし、学校が終わってからもよく顔を出していたよ。なんせ鈴君の夢はこの店を継ぐことだったからねえ」

「え」

「陽一郎さんの息子さんは大学の先生さんだったし、その長男の光君も出来のいい子だったから、もともと店は畳む気でいたらしい。」

しかし鈴君が『じゃあ、この店は俺のね』って言い出したそうだね」

「鈴君が……ですか」

「テルさんは大反対だったよ。内心は嬉しいくせに、あの子は頭がいいんだから、こんな陽一郎さんが趣味で始めたような店の後なんか継がせられるかいつてね。しかし、店主の陽一郎さんがそれはもう乗り気でね。休みの日には鈴君を着物姿で店に出したりしていたよ。うん、あれは可愛かったなあ。陽一郎さんは鈴君に菓子作りも教え始めてね。これがまた、飲み込みの早い子だったから。鈴君の作ったあれはなんだったかな……そう、黒胡麻プリンと言っていたな。あれは実に美味かった」

鈴の思い出を話す中井は実に楽しそうだ。

「私に『長生きしたら、俺がもっと美味しいもの食べさせてあげるよ』なんて言っていたこともあった。分からないものだね。私のような年寄りがまだ生きていて、あんないい子が――」

ふいに声を詰まらせ、中井は茶を飲む。

「いや、すまないね。つい。こうして思い出話をしてしまうと、やはりあの子がいないのだと思い知らされてしまっただけね」

中井たち常連客にとってこの店と鈴は、切っても切れない存在のようだ。だから自然と鈴のことを口にするし、まるでまだ鈴がいるかのように話してしまうのだろう。

「いえ、こちらこそ、すみません。……本当に……すみませんでした」

「大西君、お茶をもう一杯もらえるかな」

「はい」

中井の前にある湯呑みを持ち、大西は厨房へと下がる。  
苦しい。

あの日、自分のつまらない欲を優先し、見殺しにした助けられたかもしれない命は、大西の想像よりもはるかに輝かしく未来に溢れた命だった。



## 第六章・2

―2―

一日を終えた大西は浴室で着物を脱いだ。着物を自然と着ることができるようになったのには、自分でも驚きだ。

髪を止めていた紐を解き、眼鏡を外して鏡見ると、そこに見慣れた大嫌いな人間がいる。眼鏡のレンズはただのガラスに変えてある。眼鏡を外したところで、たいした違いはないかもしれないが、まだ輝子の前では外せない。

それよりも、自分はいつ輝子に本当のことを言うつもりなのだろうか。

言おう言おうと思っではいるのだ。なのに言葉が出てこない。言えば、ここを出て行かなければならないのは当然だ。それを嫌だと思っている自分がいる。

相変わらず自分勝手な人間だと、心底嫌気がする。

湯を浴び終えて、風呂を出た大西が癖っ毛をタオルで拭っていると、ガシャンという何かが壊れる音が耳に飛び込んできた。

慌てて浴室を出てみると、台所で輝子が倒れているのが見える。床ではコップが割れていた。

「テルさん！」

大西はすぐに戸棚の薬瓶から錠剤を二粒取り出した。輝子を抱き起こすと、水と一緒に口元へ持っていく。

輝子は苦しそうに何度か咳き込んだが、しばらくすると呼吸が落ち着いてきたようで、うっすらと目を開けて大西を見た。

「……ああ、すまなかったね」

「平気ですか」

「もう平気だよ」

輝子が大西の前で発作を起こすのは、これで三度目だった。

「本当に平気なんですか。ちゃんと病院に行ってくださいね」

「雇い主に偉そうな口利くんじゃないよ」

「それとこれとは話が別です」

「生意気になったね」

苦い口調で言い、立ち上がろうとする輝子が大西が止める。

「あ、待ってください。ガラスが散ってるんで危ないですから、向こうまで私が運びます」

言いながら輝子を抱き上げようとする大西の頭を、輝子が平手ではたいた。

「何言ってるんだい、やめとくれ」

「何って、なんですか。ガラスを踏んだら危ないでしょう」

「大丈夫だよ、これぐらい。だいたいなんだい、その格好は。はしたない」

「はい？」

慌てて浴室から出てきたため、腰にタオルを巻いただけの姿だったことを忘れていた。

眼鏡も置いてきたことに気づいた大西は、髪を拭うため首からかけていたタオルを焦って頭に被った。いや、隠すべきはもっと他の場所のような気もするが。

「こ、これは仕方ないでしょう！　だいたい、あなたがいきなり倒れたりするから！」

「それこそ仕方がないだろう」

「……とにかく恥ずかしがってないで、少し大人しくしててください」

「恥ずかしがってなんかいるもんかい」

キリがない。

大西は半ば強引に輝子を抱え上げると、自分もガラスを踏まないように気をつけながら、居間のソファまで輝子を運んだ。

酷く軽くて、脆いものを抱えている感覚に少し緊張する。

「明日は、ちゃんと病院へ行ってください。ちょうど店も休みですし」

「明日死んだって、私は全然かまやしないよ」

この年寄りは……。

「もし行かないと言うなら、医者の方に来てもらいます」

「ああ、ああ、分かったよ。まったく煩いね」

「頼みますよ。突然雇い主が居なくなったら、私も困るんですから」

わざとそんな言い方をしてみると、輝子が黙ってしまっただ大西はしまったと思った。ただ輝子を心配しているだけなのに、どうしても売り言葉に買い言葉になってしまう。

そもそも、大西がここに居られるのは、輝子のおかげなのに。

「ほら、店がなくなったら、中井さんや山本さんだって寂しがりますよ」

取り繕うように言っただ西に、輝子は苦笑いのような表情を浮かべる。

「私が死んでこの店がなくなってしまうたら、もし鈴が――」

言いかけて輝子は口をつぐんだ。

「いや、今日は少し疲れたみたいだ。お休み。あんたも早く寝るんだよ」

「……はい」

珍しく歯切れ悪く言うと、輝子は寝室へと入っていった。

いったい何を言おうとしたのだろう。

もし……もし鈴が……生きていたら、か？

鈴がもし生きていたらの話なら、店がなくなってしまったらという言葉は何か変な気がするのだが。

考えていた大西は次の瞬間、派手なくしゃみをして、自分がまだタオル一枚の姿だったのを思い出した。

## 第六章・3

— 3 —

大西はお粥を載せた盆を片手に、もう片方の手でドアをノックした。

「テルさん。食事ができました」  
「お入り」

部屋に入ると、輝子はベッドの上で上半身を起こし本を読んでいた。

「ダメですよ、テルさん。寝ていなくちゃ」  
「本を読むくらいいいだろう。寝たきりじゃたまらない」  
「いけません」

本を取り上げる大西に、輝子が眉を顰める。

九年。

大西が蜆気楼に来てから、いつの間にかそれだけの時間が過ぎていた。

輝子はここ一年ほど前から、急に体を弱くしていた。心配する大西には、いつもの憎まれ口しか叩かないが、食事も粥のような柔らかいものしか喉を通らず、それさえ小さな茶碗に一杯も食べられないのでは、体力が持たないのは明らかだ。

蜆気楼も最近、大西が一人で店を開けることの方が多い。

中井も最近、歳がせいか、店に来られなくなってしまったようだ。

った。山本や宮田は時々顔を覗かせてくれるが、それでも輝子が店先に出なくなってから、あまり長居をすることもなくなった。

陽一郎からの借金返済という名目での大西のタダ働きは、四ヵ月ほどして終わりを告げられた。

家賃も払わなくていい、食事もある毎日では、給料のない毎日にした不自由を感じたことはなかった。むしろ突然目の前に突きつけられた給料袋の方に、戸惑いを覚えた。

借金のことはもういいから、これからは金を貯めて新しい人生のことを考えろと輝子は言った。

無駄遣いは許さないと念を押された給料袋の中身は、けして多いものではなかったが、大西には妙に重く感じた。

二十八歳。新しい人生を踏み出すするには、十分若い。

しかし、何を。

ちらと頭をカメラのことがよぎったが、それはもうない。もう二度と写真は撮らない。撮りたいという気分も起きなかった。

じゃあ、何を。

毎日考えながら働いた。

何も思いつかないまま半年が過ぎ、一年が過ぎた。

そうして大西は思った。このまま、ここで働いていられたらいいのにと。流されているわけでも、安易な道を選んだわけでもない。

大西がもしここを出て行ったとき、輝子一人で店をやっていくのは難しいだろう。そのとき、この店が畳まれてしまうのは心が痛んだ。それは、かつてこの店を継ぎたいと言っていた、鈴のことを聞いたからかもしれないが。

そんな思いは口にせず蜃気楼から出て行こうとしない大西に、輝子は何も言わなかった。

使い道がなく貯まっていた金で、大西が店の手伝いをしながら調理師の免許を取り始めたときですら、輝子はただ黙っていた。

「さあ、食べてください」

大西はベッドサイドの机に盆を置き、その傍らの椅子に座って茶碗を差し出した。それを受け取り、渋々といった様子で粥を口に入れた輝子だったが、その眉がピクリと上がる。

「なんだいこれは」

「干し貝柱と鶏でダシをとった中華風にしてみましたよ。美味しいでしょう」

「変わったことをするもんだね」

相変わらずの口調だが、それでもいつもより減った茶碗の中身に満足して、片付けようと椅子を立つ大西を輝子が呼び止めた。

「ちょっと話がある。お座り」

その真剣な口調に、何かと胸をざわめかせながら、大西は再び椅子に腰を下ろした。輝子はベッドサイドの机の引き出しを開けて、中から封筒を取り出し大西に渡した。

「なんですか？」

開けてみて出てきたものに大西の顔が強張る。

そこに入っていたのは遺言状と書かれた紙と土地の権利書だった。他に輝子の通帳なども入っている。

「あんたに私の財産を譲ることにした」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

簡単に言う輝子に、大西は椅子から立ち上がり思わず声を大きくした。輝子が煩いとしても言いたそうに目を閉じ、眉間に皺を寄せる。

「いいから私の話をお聞き」

「でも、こんな！ 私はこんなものは要りません」  
「大西」

静かに名前を呼ぶ輝子の威圧感は、体が弱くなってからも変わらない。大西は封筒を手に椅子に座るしかなかった。

「もう九年も経ってしまったんだね。早いもんだ。最初あんたを見たとき、ああ、なんて間抜けな子だろうと思ったよ」

「間抜け……ですか」

「そうさ。ちよっと、その眼鏡お貸し」

「え？」

「ほら」

出された手に大西は少し迷いながらも、眼鏡を外して渡す。

「やっぱりね」

「何がです」

「ただのガラスだ」

「え、あ、ああ。私は別に目が悪いわけじゃなくて、それは……」

慌てて言葉を探す大西だったが、そんな大西を輝子は鼻で笑った。

「まったく、間抜けな子だ」

「はあ」

「この眼鏡はね、もともと陽一郎さんの物なんだよ」



「は？」

頭が真っ白になった。

「まあ、新聞を読むときにだけ掛けていた物だけど。あの日はちようど陽一郎さんの物を捨てた日だね。残しておいたところで、私が死んでしまったらゴミになるだけだし」

「え、じゃあ……」

「とっさに顔を隠して、しかも陽一郎さんに会いに来たという。なんて馬鹿な子だとね」

それは確かに間抜けだ。

「大体、そんな眼鏡程度で、私があんたの顔を分らないわけがない」

大西は息を吞んだ。

「分からないわけがないだろう。自分の息子夫婦を殺した容疑が掛かっていた男の顔と名前だ」

目を見開いて輝子の顔を見る大西を、輝子もじっと見ていた。  
やはり輝子は大西のことを分かっていた。

「そんな……じゃあ、じゃあ、なんです……なんで……」

震える声で問う。

「捕まった男が犯人じゃないと知ったときの、陽一郎さんの落胆振りといったらなかった。もちろん私もやりきれない気持ちだった。」

警察はその男は犯人じゃない。だけど、鈴はその男に助けを求めたらしいって言うじゃないか。なんで鈴を助けてくれなかったんだと、せめて誰かに助けを求めてくれても良かったんじゃないかと、捕まらない犯人へよりも、鈴を助けてくれなかったあんたへの怒りばかりが募っていったこともあった」

そうだろう。怨まれても仕方がない。

「そんな私も陽一郎さんまで亡くし、すっかり気落ちしてしまっていた。そんなとき、あんたという子は間抜けな姿で私の前に現れた。いったいどんな子だろうと思ったよ。そうしたら何のことはない。どん臭くて人と触れ合うことのできない、ちっぽけで哀れな人間じゃないか」

輝子は封筒を持つ大西の手をその上から握る。

> i 3 0 8 6 0 — 9 4 9 <

「勘違いしないでくれ。分かるだろう？ これは優しさじゃあないんだ。だから放棄してくれても構わない」

優しさではないと言う輝子の手を、大西はそれでも温かいと思う。

「分かっているさ。あんたが本当は悪い人間じゃないってこと。あんたはあの子達を殺したわけではないってこと。鈴を助けなかったことを後悔してること。なのに私は、あんたの前でわざと鈴の事を話したし、あんたをここに置いた。それがあんたを苦しめると分かっているながら。そして、これがまた、あんたをずっと苦しめることになることも分かっている」

それはまるで真綿で首を絞めるように。

「……いえ」

大西は封筒を握り締めた。

「受け取らせて頂きます」

## 第七章・1

### 第七章

—1—

それまで店の中に居た客が帰ると、大西は時計を見た。六時を少し過ぎた辺り。少し早いが店を仕舞う準備を始める。

この頃は、この時間を過ぎて客が来ることはほとんどなかった。

輝子が亡くなって三年。

大西が蜃気楼に来てから十一年目の冬だった。

輝子の死は静かなものだった。眠ったまま起きてこなかったという陽一郎と同じく、いつものようにお休みと言って床に就いたその日の夜、輝子は永遠の眠りについた。

店の前の開けた空き地だった場所には、昨年、背の高いビルが建ってしまった、店は昼間でも薄暗く人通りも少なくなってしまった。常連客だった中井も他界し、葬式で顔を合わせた山本や宮田も、その後から段々と姿を見せなくなった。

せっかく輝子から受け取った蜃気楼を、自分が廃れ<sup>すた</sup>せてしまったように申し訳ないと大西は思う。

看板を仕舞おうと外に出た大西は、店の上の階へと上がる入り口の前に、人影があるのに気がついた。

「あの、何か」

声を掛けると人影がこちらを向いた。

その人物は背の高い男で、薄暗い空の下、店の中からもれる窓の

明かりで見た顔は、まだ若いように見えた。

男はにっこりと大西に向かって微笑んだ。

「すみません。この張り紙がちょっと気になって」

男が指差す壁には、入居者募集と書かれた紙がある。

蜃気楼の三階にあった事務所、個人経営の探偵事務所だったというのを後から知ったのだが、不景気のせいか半年ほど前に事務所を畳んで出て行ってしまったのだ。

ただ開けておくのも勿体無いと思い、貸し出すビラを貼ってはおいたのだが。

「本当にこの値段でいいんですか」

男の質問に大西は苦笑いした。

「ええ。古いビルですし。駅から近いわけでもないですしね」

「そうですか。いや、でも安いですよ」

「良ければ、中をお見せしますが」

「ええ、今度ぜひ。あ、それよりも……」

男が店を見て言った。

「今日はもう閉店なんですか」



「驚いた。美味しいですね」

豆大福を頬張った男が嬉しそうに言った言葉に、大西もつい笑顔になった。

「僕は甘いものが好きでして」

まあ一つでも売れ残る菓子が減るのは大西も嬉しい。

店内の明かりの下で見た男は、外で見たよりも更に若く見えた。二十代前半といったところだろうか。顔立ちも整っているし、身なりも良い。スーツやネクタイなど、パツと見て安物ではないことが分かる。

和菓子というよりは、高級な専門店のスイーツの方が似合う気がした。

「それは有り難うございます。でも、もっと美味しい店ならいくらでもあるでしょう」

「お世辞じゃないですよ。僕の好みの味です。確かに、もっと美味しい和菓子を食べたこともあります」

それはわざわざ言わなくても……。

大西は思ったが、にっこりと向けられた爽やかな笑顔に苦笑いを返す。

「ええと、ご主人は——」

「大西と言います」

「大西さんはこの店はもう長いんですか」

茶を飲みながら、店内を見回す男。レトロな雰囲気を残す内装が珍しいのだろうか。

「ええ。もう十一年になります」

「十一年……ですか。それはずいぶんと長いですね」

「はい。もっとも、三年前まではこの店はテルさんという方のものでして」

「今では大西さんお一人で？」

初対面でずいぶん色々と訊いてくる男だ。

「そうです」

「奥さんとかは」

男の質問に大西はポカンとした。

「いえ、私は独り者でして」

まだ輝子が元気だった頃、宮田がお見合い写真を持ってくるなんてことがあったのを思い出し、大西は笑った。そのときもすぐに断ったのだが。

誰かと添い遂げるなどということは、どうにも考えられなかった。誰かを幸せにする、誰かと幸せに暮らすなど。

「そうですか」

男は茶を飲むと立ち上がった。

「ご馳走様でした。ああ、部屋、今度もう一度来ますので、そのとき見せていただけますか」

「ええ。いつでもどうぞ」

「もし、その前に他の借り手が見つかったときは、ご連絡もらえると思うんですが」

「いいですよ」

たぶんそんな人間は現れないと思うのだが。

頷いた大西に、男は胸元から名刺を取り出すと手渡す。

「では、宜しく願います。すみませんでした、もう店仕舞いをするところに」

「いえ」

「失礼します」

礼儀正しく言って、小さく頭を下げると男は帰っていった。

大西は名刺を見た。そこには『霞野心療内科クリニック 霧藤<sup>きりふじ</sup>愁成<sup>しゅうせい</sup>』と書かれていた。



## 第七章・2

―2―

ドアベルの音がして、入ってきた人物に大西はにっこりと微笑んだ。

「どうでしたか」

「ええ、確かに少し傷んでるところもありましたけど」

言いながら大西に持っていた鍵を返す男。

「中であつた本棚とかはそのまま使ってもいいんですか」

「いいですよ。処分するならするで、言ってくだされば前もってしておきますし」

「そうか……うん、やっぱりいいな」

男、霧藤 愁成は口元に手をあて、少し迷うように考えている。  
そんな仕草が自然で様になる男だ。

あれから三日後に、霧藤は本当に部屋を見せてくれと再び店にやってきたのだ。

「どうぞ、ゆっくり決めてください。焦らなくても、他の借り手が現れることはたぶんないですから」

「本当ですか？ そんなこと言って、素敵な女性の借り手が現れて、そっちに貸すことにしましたなんて言わないでくださいね」

「ああ、それは迷いますね」

「そんな。お願いしますよ」

そんなにこのビルが気に入ったのだろうか。近くには新築のマンションもアパートもある。霧藤の身なりから察するに、収入も悪くないはずだから、家賃の安さというのはそれほど問題ではないように思えるのだが。

懐古趣味というものだろうか。

霧藤は腕の時計を見るとカウンター席についた。

「すみません。お茶とお菓子をいただけますか」

「はい、ただいま」

どうやら、大西の作った菓子の味を好みと言ったのは、本当にお世辞ではなかったようだ。

「今日はお仕事は」

盆に載せた菓子と茶を出しながら、今日は大西から訊ねる。

「ええ、この後に」

「名刺にクリニックとありましたが……お医者さんなんですか」

「そういうことになります。勤めているクリニックが、ここから結構近いんですよ。そのバス停からバスで十分ほどの所で。だから、もしここを借りられたら、今住んでる所より通勤にも便利でしてね」

霧藤は菓子に黒文字を刺した。

今日の菓子はわらび餅。弾力のある食感と滑らかな舌触りの餅は、口に入れば喉につるととろける。風味の良いきな粉に黒蜜がからんで、香ばしい甘みが口の中に広がる。

一口食べた霧藤の顔がほころぶのを見ると、大西も満更でもない気持ちにさせられる。

「まあ医者といっても精神科医なんですが」

「精神科……ですか。それはまた、大変そうですね」

「実際にメスで体を切り開くのは違った難しさはありますが、実に興味深い仕事だと思いますよ」

「どんな患者さんがいるんですか」

「小さな鬱から、幻覚を見るようなものまで症状は様々です。本人に自覚があるものからないものまで」

霧藤は落ち着いた見た目よりも、よくしゃべる男だった。精神科という職業柄、患者との対話が重要になるからなのかもしれない。大西にはとても、そんな仕事はできそうにない。しかし霧藤との会話は思いのほか弾む。やはり霧藤の話し方がうまいのだろう。

「大勢の患者と接しているうちに、ときどき思うことがあります」

「为什么呢」

「誰より自分が一番、精神を病んでいるのではないかと」

「……」

大西が返す言葉に戸惑っていると、霧藤が可笑しそうに肩を揺らし、大西は苦笑した。

「患者さんの前では冗談でもそれ、言っちゃダメですよ」



カタカタとキーボードを叩く音は小さくても、店内が静かだと意外と大きく聞えるものだ。

「どうぞ」

茶とお菓子を運んできた大西に、霧藤は顔を上げた。

「ああ、有難うございます」

あれから、霧藤は頻繁に店に顔を出すようになった。まだ三階の部屋の契約はしていないが、こうして何度も足を運んでくれる客ができたことは、大西には喜ばしいことだった。

「すみません、迷惑じゃないですか」

店の奥のテーブル席で、ノートパソコンを開いていた霧藤はそれを一度テーブルの端へと寄せ、大西の運んできた菓子を手元に引き寄せる。

「見ての通り、他にお客さんもいませんし。気にしないでください。……それもお仕事ですか」

「これは仕事というか、知り合いに頼まれて……手伝いみたいなものです」

「手伝いですか」

「雑誌の一ページにちよつとした文章を」

「ああ、コラムみたいなものですか」

「まあ……そんなようなものです」

小さく笑いながら、霧藤はおしぼりで手を拭くと、湯呑みを口に運んだ。

若い医者知識を交えた、評論のようなものなのだろうか。なんにしろ若いのに多才なことだ。

霧藤は茶を飲み終えてからも、しばらく席でキーボードを叩いて

いたが、ふと腕の時計を確認するとノートパソコンを閉じて立ち上がった。

「お帰りですか」

「ええ。ご馳走様です。……あ、そうだ」

財布を開いた霧藤は何か思いついたように、自分が食べた菓子の代金よりも、多い金額を大西の差し出したトレーの上に置いた。

「今日のお菓子、持ち帰ることができますか」

今日の菓子はどら焼き。餅と違い固くなることもないし、四、五日は日保ちするものだ。

「大丈夫ですよ」

「それじゃあ、三個ほどいただけますか。知り合いが和菓子を好きでして。ぜひ大西さんの作ったお菓子を食べさせたい」

「それはそれは。有難うございます。今、包みますので、ちょっとお待ちくださいね」

いったい誰だろうか。病院の同僚か。

その人も気に入ってくれるといいのだが。

思いながら、大西は薄い和紙にどら焼きを一つ一つ包むと箱に入れた。

## 第七章・3

— 3 —

その日、朝から降っていた雨は日が落ちてきても、しとしと降り続いていた。

ここ二、三日はずっと天気が悪い。そしてこんな日はもう客が来る事もないのだ。

大西はいつものように看板を店の中に入れ、営業中の札を裏返しドアの鍵をかけた。

客がつかなかったテーブルも丁寧に拭き、濡れた床にはモップを掛ける。厨房の片付けも終わると、大西は店の明かりを落とした。

表よりも暗くなった店内を見回し二階へと上がろうとした大西は、ふと目の端に映った物に足を止め、もう一度店へと視線を戻す。

入り口のガラスの向こうに浮かび上がった、しゃがみ込んでいる人のシルエット。

雨宿りでもしているのだろうか。

大通りからかなり奥に入ったこの場所まで、わざわざ軒下を借りに来るなんて妙な気もするが。元々この辺りに用事でもあったのだろうか。

早めに店仕舞いをしてしまったのは気の毒だったかもしれない。再び店を開けることはできなくても、傘くらいなら貸すことはできる。

大西はカウンター席上部の明かりだけを点け、再びドアへと向かう。

近づいて見ると、その人影はなんだかずいぶん小柄だった。

ドアにもたれるようにしているその人を、驚かさないようにそつとドアを開ける。

「すみません。今日はもう店仕舞いをしてしまつて。よければ傘をお貸し——」

にこやかに言葉をかけた大西だったが、その言葉を途中で失った。口元が……いや、顔全体が強張っていくのを感じる。

後ろで開いたドアにその人は、雨に濡れた体を自分で抱えるようにしゃがみ込んだまま、ゆっくりと首を捻って大西を見上げた。

雨のせいもあり寒さは一層厳しくなっている。なのにもまるで寝間着のような薄着姿で、小さく肩を振るわせているその人は、まだ幼さの残る少年だった。

濡れた髪が額に張り付き、雫が頬を伝って顎から滴っているその顔。

あの日は雨ではなく赤い血が、口元から流れていたその顔。仏壇に飾られた照子の写真の横で今も笑っているその顔。

本人を自分の目で見たのはたった一度だったが忘れない。

大西を見つめるその顔は、まぎれもなく『朝日奈 鈴』だった。外の冷えた空気のせいだけではない寒気が大西の全身を襲う。

> i 3 0 8 6 1 — 9 4 9 <

なぜ。

今頃になって、自分を呪いにも来たというのか。

ゆらりと立ち上がった鈴に、大西は思わず店の中へと一步後ずさる。

鈴が青ざめた唇をうっすら開いた。

「……たすけて」

あの日と同じ弱々しい声で、あの日と同じ言葉を口にした鈴は、そのまま崩れるように店の中へと倒れ込んで来た。

思わず支えようと出した手に握った鈴の腕は、死人のように冷たかったが、確かに肉の感触があった。尤も、ひどくやせ細った腕は肉というより、骨と皮といったほうが正しいように思える。

それでも幽霊なんかではなく、実体のある生きた人間の感触だった。

これは『朝日奈 鈴』ではないのか。

いや、むしろそう考えるのが普通なのだ。鈴は十三年前に死んでいる。もし仮に……仮に生きていたとしても、あれから十三年が経っているのだ。この少年が鈴であるはずがない。

ならばこの少年はいったい誰なのか。

「もしもし。君？ 大丈夫かい。しっかりするんだ」

やっと掛けた声は心なしか震えていたように思う。

すると少年は大西の着物を掴んで顔を上げた。その手に、あの時コートの裾を掴まれたことを思い出す。黒い瞳にじっと見つめられ、大西はざわめく胸を押さえられない。

「お願い。俺を匿<sup>かく</sup>まって」

頼りなげに眉を下げ、怯えたように言った少年の言葉は意外な物だった。

「匿<sup>かく</sup>まう？」

「怖い人に追いかけてるんだ」



切羽詰った声で懸命に訴える少年に大西は戸惑う。

見ると少年の足元はサンダルを履いただけの裸足だ。いったい何があったというのだろう。

虐待。まず頭い浮かんだのはそんな言葉だった。

「……お願いです。助けて下さい」

迷っている大西に、丁寧な口調になり少年はまた助けを求める。  
どうする。

また見捨てるのか。

……あの時のように。

「少し落ち着いて。今、タオルを持ってきてあげるからね」

とりあえず少年を店の中へと促す。二階へと上がりバスタオルを手にして、少年の濡れた薄着を思い出し、自分のトレーナーの上下をタンスから取り戻った。

「さあ、濡れたものを着替えた方がいい。そのままだと風邪を引くよ。君には大きいかもしれないけど、今の君の服よりはましなはずだ。そこで着替えておいで」

少年にタオルとトレーナーを渡し座敷部屋を指す。少年はにこりともせずに渡されたものを抱えると、大西の顔をまた見る。

「有難う。親切だね」

先ほどの怯えていた声とは違い、しっかりとした声で少年は言ったが、その口調は抑揚がなくどこか冷めた印象を受けた。

座敷部屋へと上がった少年が戸を閉めると、大西は大きく息をつく。

さあ、どうする。

今のうちに警察にでも連絡をした方がいいのではないか。

しかし……本当にそれでいいのだろうか。

突然目の前に現れた、かつて自分が見殺しにした少年に瓜二つの人間の出現に、大西は混乱していた。

しかも、また大西に助けを求めているのだ。

「……着替え終わったかい」

「終わったよ」

返ってきた返事に戸を開けると、タオルを頭に引っ掛けながら、

少年は大きすぎるズボンの裾を折り返していた。

いったいこの子は、誰なんだろう。どこから来て、いったい誰に追われているというのか。

大西が尋ねようと口を開いたその時、入り口の方で物音がした。

少年が厳しい顔つきでそちらを睨む。

「見て来るよ。君はここにいて」

大西は少年を座敷部屋に残し戸を閉めた。

決めたのだ。あの少年が自分に助けを求めるなら、自分はあの少年を助けよう。今度は見殺しになどしない。あの時と同じ過ちを繰り返したりなど、二度としない。

暗い店内のドアの前に誰かがいた。

「すみませんが、今日はもう閉店です」

大西は少し緊張して、その人物に向かって言ったが、

「そうですか。それは残念だ」

大西の言葉を気にした様子もなく、店の中へと更に一歩足を進めて来た人物の、もう見知った顔に大西の緊張が緩む。

「霧藤さん」

「こんにちは。もう、こんばんは、ですかね」

いつものように爽やかな笑顔で、霧藤は背広についた雨の雫を払った。

店に入ってきたのが霧藤と分かり、大西は小さく息をついた。

「すみません。見ての通り、今日はすっかり店仕舞いしてしまっていて」

「いえ、こんな天気ですしね。こう雨が続くと、商売上がったりじやないですか。こんな日は外に出ないで済むならそうしたい」

「そうですね。でも、うちはいつもお客さんは少ないですから」

しかし、それなら霧藤はいったい何をしに来たのだろう。

そもそも、店の明かりは今、カウンターのうしろに点けていないし、看板も仕舞ってある。ドアの鍵は先ほど少年を入れたときに開けたままだった。

それでも、蜃気楼が閉店していることは分かったはずだ。それなのに霧藤は店の中に入ってきた。

その行動を少し変だと、大西が感じ始めたときだ。霧藤が言った。

「ところで、今しがた、ここに誰か来ませんでしたか」

大西は思わず目を丸くして霧藤を見た。霧藤も大西を見ている。いつもと同じ微笑を口元に浮かべながら。

「……誰かとは」

答えず聞き返した大西に、霧藤が少し目を細める。

「少年です。まだ中学生くらいの。来ませんでしたか」

どういうことだ。あの少年が追われているというのは、霧藤にということなのか。少年の言う“怖い人”というのは、霧藤のことなのか。

「大西さん？」

「来ませんでした」

答えを促す霧藤に、大西は答えた。嘘の答えを。

「誰も来ませんでした」

「そうですか」

霧藤の視線が店の床に落ちる。モップを掛けた床に、ドアから座敷部屋へと水の足跡が続いている。座敷部屋の上がり口の下には、少年の脱いだサンダルがそのままだ。

大西は霧藤の視線を遮るように、霧藤の前に立った。

「すみません。今日はもう私も休ませていただきましたくて。またお越しください」

すると、霧藤の表情が変わった。呆れたような感心したようなそ

んな表情。

「なるほど」

溜息をつきながら店の奥の方を見ると、霧藤はよく通る声で誰もいないはずのそこへ向かって言った。

「鈴！ いるんだろ。出てくるんだ！」

大西は息を呑んだ。今、霧藤が口にした名前は――。

しかし、座敷部屋の戸が開くことはなかった。店の中は静まり返っている。霧藤が座敷部屋の方へ一歩足を踏み出し、大西はその腕を掴んだ。

「お帰りください。誰もいないと言ったでしょう」

事情が分からないまま、あの少年を匿うことが良いことなのかは分からない。しかし、ここであの少年を霧藤に渡したら、大西自身がまた後悔をするような気がする。

そんな大西の行動に、霧藤はまた口元に笑みを浮かべた。ただし、いつも見慣れた爽やかなそれとは違い、冷たくどこか意地の悪い物に見えた。

「彼がどんな風に言ったかは分かりませんが、僕は別に彼を悪いようにはしませんよ。ただ、元いた場所に連れて帰るだけです」

すでに霧藤はここに少年がいると決め付けている。

「あれは頭の回転のいい子でしてね。まあ、おそらくは同情を誘うような演技でも、して見せたんでしょう。彼の演技には騙される人

も多いですから。本当に困ったものですよ」

少し大きめの声は、座敷部屋にいる少年自身に聞かせるためか。

「……いい加減にしろ。私はそんな子は来ていないと言ったんだ。帰ってくれ。警察を呼んでもいいのか」

久しぶりに荒くなった口調に大西自身も驚いたが、霧藤もキョトンとした顔で大西を見て、次の瞬間、くつと吹き出しそうになった口元を押さえた。

何が可笑しい。

「呼べばいいでしょう。いや、その方が手っ取り早いかもしれない。ぜひ呼んで欲しいですね。言ったでしょう。僕は精神科医でしてね。彼は僕の患者なんです。精神科の患者が病院から抜け出したなんて、大変なことだということぐらい、あなたでも分かるでしょう？」

あの少年が霧藤の患者。

「それに、あなたは警察が嫌いなんじゃないんですか」

少し声を潜めて言った霧藤に、体が固まったように動かなくなる。

「僕が知らないとも思っていたんですか、大西 圭介さん。知っていますよ。あなたが十三年前に何をしたのか。いや、しなかったという方が正しいのかな。罪滅ぼしでもしているつもりですか。…あの日は助けなかったのに」

違う。

あの日の罪が滅びるなんて思っていない。

「帰ってください。あの子は渡しません」

大西は少年がいることを明らかにしながらも、霧藤に少年を会わせる気がないことを伝えた。

「……いいでしょう。今日はあなたに預けます。せいぜい正義の味方の気分にも浸るといい」

くるりと大西に背を向け、霧藤はドアを開けた。

「そうだ、一ついいことを教えましょう。彼はまぎれもなく朝日奈鈴。十三年前にベランダから落ちた、朝日奈家の次男です。幽霊でもなければ、よく似た他人でもない」

傘立てに入っていた傘を開き、にっこりと微笑む。

「では、また明日」

## 第七章・3（後書き）

ここまでお読みくださって有難うございます。  
お話は第八章・1に続きます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8828q/>

---

夢わたり 《其の伍》

2011年11月13日12時44分発行